SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

日本最初のドイツ語お雇い教師カデルリー（1827-1874）というひと：スイスの貧農の生まれ、傭兵、家庭教師、冒険旅行家、「鉱物学教授」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-02-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 城岡, 啓二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000635

日本最初のドイツ語お雇い教師
カデルリー(1827-1874)というひと
―スイスの貧農の生まれ、傭兵、家庭教師、冒険旅行家、「鉱物学教授」―

城　岡　啓　二

0．カデルリーの生地、カントン・ベルンの小村リンパハを訪ねる
1．『カデルリー文典』を書いた日本最初のドイツ語お雇い教師
1．1　お雇い教師だった期間
1．2　お雇い教師としての業績
2．1991年に翻訳出版されたクニッピングの未公刊の自伝
3．変名で見つかったカデルリー関連文献とカデルリーの生涯
3．1　『スイス歴史百科事典』とカントン・ベルン歴史協会の『ベルン伝記集』
3．2　『オンタリオ州のスイス人』
4．カデルリーはなぜ変名を使い、なぜ経歴を詐称したのか？

0．カデルリーの生地、カントン・ベルンの小村リンパハを訪ねる

2006年夏にスイスのカントン・ベルンの小村リンパハを訪問した。ベターキンデン(Bätterkinden)まで行けば、そこからバスがリンパハまで出ている。ただし、バスはせいぜい一時間に1本で、まったくバスの走らない時間帯もある。バスを利用せずに歩くつもりならベターキンデンの1駅前のシャルーネン[1] (Schalunen)や2駅前のビューレン・ツム・ホーフ (Büren zum Hof) の方が近い。

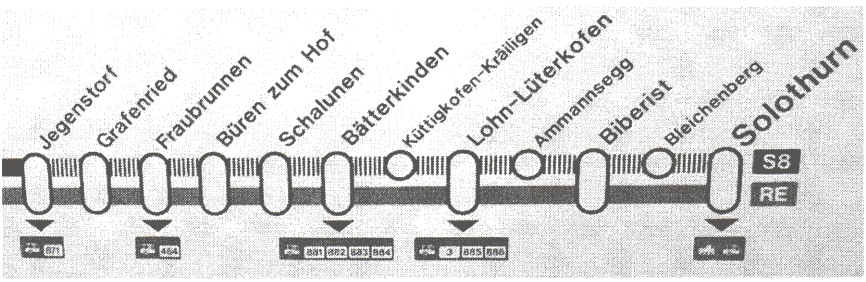

図1：ベルン(Bern)からリンパハ(Limpach)に行くにはゾーロトゥルン(Solothurn)行きの電車に乗り、ベターキンデン(Bätterkinden)で降りて、バスに乗り換える。

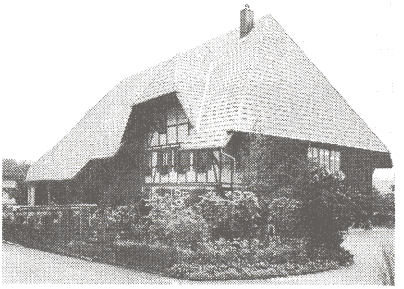

図２：リンパハの民家、家畜小屋、納屋と居住部分を一つの屋根でまとめる作り方になっている。

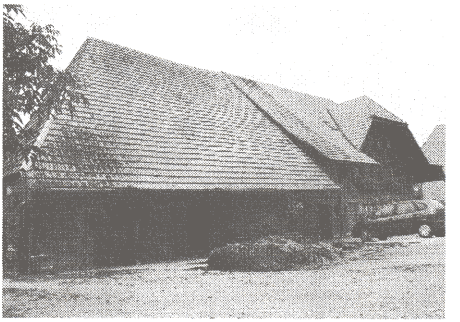

図３：リンパハの民家、この民家も家畜と飼料などを収める部分が巨大な屋根で作られている。

リンパハでは写真のような民家をよく見かけた。この地方に特徴的な家の作り方である。居住部分は３階建てでつくられているのだが、片側の納屋と家畜小屋として機能している部分は、屋根が３階部分から２階部分を全部覆いつくしているため、まるで大きな屋根の平屋建てのように見える作り方になっている。

図４：19世紀初頭に建てられ、カデルリーが生まれる前からあったリンパハの教会。カデルリーはこの教会の牧師にも手紙を書き送っていたようだ。

リンパハは、ドイツ語版ウィキペディア[2]によると、2004年末の人口が327人の小村であり、「1850年時点で人口426人」とあるので、過去150年ちょっとの間に過疎化の進んだ農村であると言える。近年は、ベルンやゾーロトゥルンに働きに出ている人の住宅地とにもなっているらしい。

教会区としてのリンパハ教区(Kirchgemeinde Limpach)のホームページ[3]には „wir sind gut 900 Menschen“ と紹介され、近隣のビューレン・ツム・ホーフとシャルーネンをあわせた教区としても、人口は900人強にしかならないようだ。

観光地でもなく特に見るべきものもないリンパハを訪ねたのはリンパハがどんな位置にあって、どんな場所なのか見ておきたかったのである。じつは、この地に生まれて、日本のドイツ語教育史上重要な足跡を残したスイス人がいたのである。

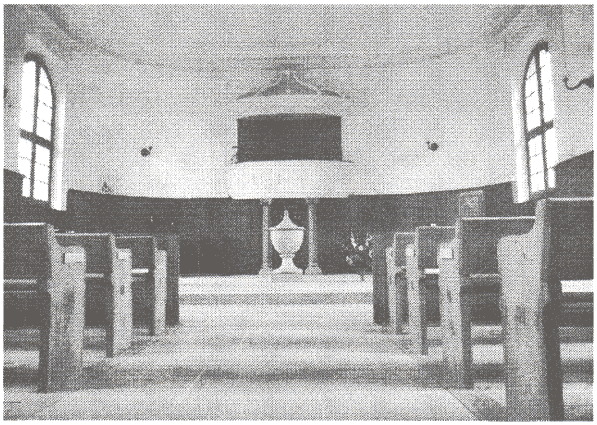

図５：シンプルな作りの教会内部。祭壇部分では村人たちがダンスもしたりするのだろうか。リンパハ教区のホームページには若い女性たちが民族衣装で踊っている写真が使われている。

ヤーコプ・カデルリーである。カーダーリぐらいの書き方の方が正確な発音を反映していると思われるが、本稿では現在いちばん標準的な表記だと思われるカデルリーを基本的に使っていきたい。日本最初のドイツ語お雇い外国人教師である。幕府の洋学教育機関であった開成所は明治維新で閉鎖されたが、すぐに復活している。『東京開成学校一覧』（明治８年版[4]、明治９年版[5]）には明治元年の９月には再興したと書かれている。復活した洋学校の名称であるが、幕末以来の開成所という名称も使われ続けたようであるが、いつのまにか開成学校が正式名称になっていたようである[6]。この学校にカデルリーは日本最初のドイツ語担当の外国人教師として採用されている。この開成学校は明治２年12月には大学南校と名称を変えている。カデルリーはドイツ語担当の大学南校最初のお雇い外国人教師でもある。大学南校に雇用されていたドイツ語担当のお雇い外国人は、スイス人のカデルリーのあとはドイツ人が続き、ワグネル[7]（「近代窯業の父」、「近代工業の父」、「近代日本建設の父」）、ホルツ[8]（プロイセン政府派遣教師）、クニッピング[9]（日本最初の天気予報を出したひと）、シェンク[10]（日本で最初に鉱山学・鉱物学の授業を担当したひと）と近代日本の成立に貢献したお雇い外国人が続いている。ホルツはプロイセン政府派遣で別格だったこともあって大学南校教師といっても独特の立場だったようであるが、「現地採用」のカデルリーとワグネルとクニッピングは同僚として大学南校の最初期のドイツ学の教育にあたっている。カデルリーは『カデルリー文典』と呼ばれる522ページの文法書を1870年に大学南校から出版し、滞日期間が短かかったにもかかわらず、多くのドイツ語教師を育てている。明治初年は外国語の「商品価値」がきわめて高かった時代であり、大学南校などで数年間ドイツ語を習うだけでド

イツ語教師になって行ったようだ。東京府に提出された私塾や家塾の「開学願書」や「開学明細書」の教員履歴には、カデルリー（といっても表記はカートレエ、カドリー、カトリー、カデリー）から教わったと書いているドイツ語教師に前園道、佐久間正節、河井友輔、山縣信當、荒川文平、鈴木孝之助、中村雄吉、吉埜重明、久間盛久、司馬盈之、上坂操がある（上村 1985b）。なお、司馬凌海という言い方の方が知られる司馬盈之（みつゆき）は当時から語学の天才と言われた人物である[11]が、フランス語でもカデルリーの名をあげている。司馬凌海がどこでカデルリーにフランス語を教わったのか不明であるが、カデルリーは南校を満期解雇になったあと、横浜で高島嘉右衛門の開いた学校（市学校、町学校、藍謝堂、高島学校）で教えていたことまで分かっている。「外務省記録・外国人雇入鑑（自明治5年1月至同年9月）」に基づくと、雇用契約は明治5年1月から6ヶ月である。市学校では、西堀（1996）によれば、ドイツ語とフランス語を教えていたのだというが、カデルリーが市学校でフランス語も教えていたことを明確に示す資料を西堀氏は示していない。「カリキュラムの中に英語の他にフランス語やドイツ語が見られる」（西堀 1988:556）ということと、教えられそうな外国人教師はカデルリーしかいなかったということなのかもしれない。『高島翁言行録』（大野太衛編、東京堂、1908）の市学校についての部分は「明治三年の秋頃横浜伊勢山下に学校を建築して高島学校と名づけり其教師としては正則科に当時大学南校の教師なりし瑞西人カドレー氏並に米人バラ氏兄弟を招聘し」（p.174）のように書いてある。

市学校との契約が切れたあとはどうなったのか、いつ日本を出国したのかなど、かつてはほとんど分かっていなかった。上村（1985）が端的に述べているように、「国籍がスイスであるという以外、生没年をはじめその経歴はほとんど知られていない」（p.3）、「彼の生涯とくに来日前、帰国後の動静については全く知られていない」（p.5）という状況が20世紀末までのカデルリーをめぐる状況だったと言える。

ところが20世紀も末になって状況は変化してきた。まず、1991年にはかつての大学南校時代の同僚が家族のために残していた未公刊の自伝が『クニッピングの明治日本回想記』として翻訳され、出版された。ここにはクニッピングから見たカデルリーについての記述が見られる。

1. 小関恒雄・北村智明訳編：『クニッピングの明治日本回想記』、玄同社、1991。オリジナルは *Aufzeichnungen aus meinem Leben für die Kinder und Enkel*

（「子供と孫のための自伝」）という題名の未公刊の自伝で、編集して訳したものである。以下、『回想記』と略すこともある。

また、1988年に『スイス歴史百科事典』の三ヶ国語（ドイツ語、フランス語、イタリア語）のプロジェクトが立ち上がり、財団が結成されている。『スイス歴史百科事典』は広い意味でスイス史に関係しそうな項目を広く集めようとしている現在進行中のプロジェクトである。2002年に書籍の第1巻が出版され、全13巻の予定で出版が続けられる予定であるが、1998年以来インターネット上でもオンライン版（e-HLS[12]）が無償で提供されている。ここにカデルリーについての記述があったのである。あとで見るように、カデルリーは日本では変名を使っていたようで、Kaderlyではなく、Kaderliで記載されている。

2. *Historisches Lexikon der Schweiz* (HLS).『スイス歴史百科事典』、編集はdie Stiftung Historisches Lexikon der Schweiz（スイス歴史百科事典財団）。以下、『事典』と略すこともある。

さいわい、『事典』のカデルリーについての記述の元になったカデルリーの伝記もカントン・ベルン歴史協会編纂の伝記集に残されていることが分かった。

3. A. Walther: „Jakob Kaderli. 1827-1874.“, *Sammlung bernischer Biographien.* 3. Band, hrsg. von dem historischen Verein des Kantons Bern. Bern (Verlag von Schmid & Francke). 1898, 363-376. 以下、カントン・ベルン歴史協会編纂の『ベルン伝記集』のことを『伝記集』、また、これに掲載されているカデルリーの伝記を「伝記」と略すこともある。

「伝記」の記述に基づくと、カデルリーは日本を出てからアメリカに向かい、アメリカとカナダに滞在していたようである。カナダではオンタリオ州でスイス移民が予定されている移住地の調査を行い、報告書を書いていることが「伝記」に書かれている。カナダのスイス移民についての本があれば何か分かるかと思い、調べてみると、カデルリーについての記述が見つかった。ただし、カデルリーはここでも変名を使っていて、ヤーコプ・カデルリー（Jakob Kaderli）ではなく、ジャック・カデルリー（Jacques Kaderli）となっている。

4. Joan Magee (1991), *The Swiss in Ontario.* Windsor, Ontario (Electa Books). 以下、引用する場合は『オンタリオ州のスイス人』とする。

カデルリーが開成学校・大学南校・南校と名前を変えていった維新政府の洋学校でドイツ語を教えていたのは1869年、1870年、1871年（明治2年～明治4年）であったと考えられるが、1世紀以上を経て、ようやく、お雇い外国人教師カデルリーについて調べる条件が整ってきたわけである。本稿では、第1章で日本滞在中のカデルリーについてまずまとめ、2章以降では、新たに見つかった『事典』の記述や「伝記」やカナダで書かれた『オンタリオ州のスイス人』の内容をもとに、内容の紹介と事実の洗い出しを中心にして、全体として、カデルリーというひとの経歴と生涯をまとめておきたい。現在のところ、上の1から4までの新資料を扱ったカデルリーについての論文や図書は出版されていないので、資料的価値もあると思われるので、引用する場合は、翻訳だけでなく、原文も可能な限り添えたい。

1.『カデルリー文典』を書いた日本最初のドイツ語お雇い教師

1.1　お雇い教師だった期間

カデルリーがお雇い教師だった期間は、明治初年の公文書にきちんと整理されていなかったことや学校の記録もあいまいだったため、分かりにくくなっているようである。『東京帝国大学五十年史』(1932) に「外国教師」の任免等に関する表が掲載されているが（上冊第1巻第2篇補遺)、スイス出身の「ヤコツブ・カデルリー」は、担当科目がドイツ語で、明治3年1月から明治4年11月までの雇用期間とされている。『資料御雇外国人』（ユネスコ東アジア文化研究センター編）にまとめられているカデルリー関連の各種資料では、雇用開始時期を明記している資料は1点しかなく、東京大学の「傭外国人教師講師名簿」だけであり、明治3年1月24日となっている。『東京帝国大学五十年史』の記述のもとになっている資料と同一の可能性が高い。「傭外国人教師講師名簿」は古い記録ではなく、昭和初年に編纂したものらしく、カデルリーの時代については正確な情報に基づいていないようである。カデルリーが明治3年1月24日雇用という「傭外国人教師講師名簿」の記述は正しいはずがない。なぜなら、「大学南校雇教師瑞士國人カーデルリー相州箱根へ旅行」という記録が『太政類典』（第1編・慶応3年～明治4年）にあり、伺いの日付が明治2年12月19日になっているからである。明治2年にはカデルリーは大学南校教師になっていたはずである。西堀（1996）には明治2年6月にカデルリー開成学校に雇入れと書いてあるが、この記述の元になっているのが『東京開成学校一覧　明治九年』である。東京開成学校と東京医学校が合併して東京大学が誕生するのが明治10

年であるから、その一年前の東京開成学校の一覧[13]である。東京開成学校というのは、大学南校が文部省の設置とともに南校になり、その後、第一大学区第一番中学になり、それが、さらに開成学校とかつての名称に戻され、さらに明治7年に東京開成学校に改称されたものである。「東京開成学校沿革略史」の問題の箇所は次のように書かれている。「二千五百二十八年即チ王政維新ノ際一時本校ヲ廃シ兵隊屯営トナス此年九月朝廷之ヲ再興シテ川勝近江柳川春三ヲ以テ頭取トス未タ幾クナラスシテ内田恒次郎之ニ代ル翌年一月細川潤次郎ヲ以テ学校権判事トシ公務ヲ掌ラシム此月佛人プーセー氏ヲ以テ佛語学教師トシ英人パーレー氏ヲ英語学教師トス四月米人ヴェルベッキ氏ヲ以テ英語及学術教師トシ尋テ教頭ヲ兼ネシム六月瑞西人ガデルリー氏ヲ以テ獨語学教師トス七月細川氏転任シ加藤弘之之ニ代ル[14]」(p.10)。「二千五百二十八年即チ王政維新ノ際」というのは皇紀であるから、マイナス660年で西暦1868年で、明治元年のことになる。ガデルリーと表記されているカデルリーが採用されたのは翌年の六月だから、明治2年6月である。お雇い外国人の動向だけを『一覧』の記述から取り出しておくと、フランス人プーセーとイギリス人パーレーが明治2年1月に採用され、アメリカ人ヴェルベッキ(フルベッキ)が4月に採用され、スイス人ガデルリー(カデルリー)が6月だと述べている。『一覧』の記述が正しいとすれば、明治2年6月にカデルリーは開成学校に採用されていることになる[15]。上村(1985a)によると、松野磵という農科大学教授の履歴書(東大蔵)の明治2年のところに「開成学校御雇瑞西人カトルリ氏ニ就キ独乙学初歩ヲ学フ」と書いてあるのだという。上村は「彼はすでにその時点で来日中であったと思われる」と控えめに推論しているが、カデルリーが明治2年6月採用だとしたら、松野が明治2年にカデルリーに教わっているのは不思議ではないし、「開成学校御雇瑞西人」という書き方も当然であろう。じつは、山岸(1939b:387)に「在職は明治二年から同四年まで」と書いてあるから、「東京開成学校沿革略史」のようなものを見ていて、知っていたのかもしれない。一方、満期解雇の日付は「傭外国人教師講師名簿」の明治4年11月26日というのはおそらく正しいものと思われる。『太政類典草稿』(第1編・慶応3年〜明治4年・第59巻・外国交際・条約、外客雇入)でも「独逸学教師カデルリー儀来月ニテ傭期限相満候…猶六ヶ月雇増」となっている箇所の大学の日付が4年4月23日になっていて、翌月から6ヶ月なら11月で「傭外国人教師講師名簿」の記述と一致するからである。

さて、カデルリーがお雇い教師だったのは明治2年6月から明治4年11月26

日だったと思われるが、第3章で詳しく見る「伝記」には香港や上海を旅行し、揚子江や黄河で船に乗っているが、その後、北京には行かなかった理由を、「天津での暴動の勃発のためヨーロッパ人として北京へ行くことが得策だと思えなかった」(「伝記」、p.371) ためとしている。そのために北京に行かずに日本へ行くことにしたのだという。しかし、この記述はまったく疑わしい。天津の暴動とは、天津教案と呼ばれる暴動事件で、フランス系のキリスト教教会の孤児院に対する児童誘拐疑惑に端を発して、フランス系の教会が襲撃され、フランス人の修道女や神父、中国人のキリスト教信者などが殺された事件である。暴動は1870年6月21日に起きている。当時の和暦に直すと、明治3年5月23日である。この時期にまだ来日していなかったということは有り得ない。カデルリーが天津教案を持ち出した理由としては、北京に行かなかったことを説明するにはもっともらしい内容なので、カデルリー自身が勘違いしてしまったか、あるいは、香港や上海、揚子江や黄河を旅行していながらなぜ北京に行かなかったのか、うまく説明できなかったために適当な内容を手紙に書いて故郷に送ったものではないだろうか。

1.2　お雇い教師としての業績

日本には合計3年間ぐらい滞在したはずであり、そのうち明治2年6月から明治4年11月26日までは政府直属の洋学教育機関で働いたカデルリーが多くのドイツ語教師を育てたことはすでに述べたが、カデルリーは、2年半程度のお雇い教師の期間に、おそらく長年にわたる家庭教師の仕事の中で集めた材料を使ったものだろうが、522ページの文法書を書いている。日本滞在中のカデルリーの最大の業績であると思われる。

明治期のお雇い外国人教師で本格的なドイツ文法を執筆したのはカデルリーだけである。他には、東京外国語学校や新文学舎で教えたアドルフ・ヘルム(Adolf Helm)が全52ページの薄い文法関係の本 *Die Wortbiegung der deutschen Sprache: zum Gebrauche der Unterklassen des Gaikoku Gogakko*(「ドイツ語の語活用、外国語学校の下級クラス向け」、1880) を書いているのがあるだけであろう。これは、主として、名詞、冠詞、形容詞、動詞などの語形変化がまとめられた小冊子である。上村 (2001：39) は『カデルリー文典』について「我が国で出版された最初の本格的文法書で、今日の文法書の原型をなす。明治10年頃まで盛んに行われたが、それ以降はシェーフェル独逸文典に次第に取って代わられる」と書いている。いわゆる『カデルリー文典』はドイツ語で書かれ、*Lehrbuch der*

deutschen Sprache für die höhern Classen der kaiserlich-japanischen Akademie（直訳すれば「日本帝国学校の上級生向けドイツ語教科書」）という題名で、522ページあるのは1870年の初版である。何種類もの版があるが、刊行年で分類すると、4種類あったようだ。

1870年：初版
1872年：第2版
1878年：第2版復刻版（中川忠明翻刻出版人）
1886年：第3版（誠之堂、扉には「1885」と印刷されている）

第2版以降はカデルリーに無断で出版されたものであり、これがちょっとした「外交問題」に発展している。1872年の第2版が出版された当時、南校をやめていたけれどもまだ横浜の市学校の教師をしていたカデルリーは、これに断固として抗議したようである。第2版は初版の前半の文法部分をさらに圧縮した内容である。字を小さくし、1ページ当たりの文字数を増やしているが、522ページだったものを192ページに削減して、ラテン文字で書かれていたものをドイツ文字に書き直している。外務省がカデルリーから厳重な抗議を受けて、文部省がそれを取り次ぎ、南校に照会している。その辺の事情は山岸（1939b）の東京大学本部に残る南校文書の研究が詳しい。カデルリーが日本を去るのは、「伝記」によれば1872年7月22日であり、和暦に直すと明治5年6月17日である。カデルリーが直接外務省に抗議をしたのかどうかは不明であるが、外務省から文部省への問い合わせは明治5年5月27日付けであり、南校は5月の晦日に回答している。回答がカデルリーに届いたかどうか分からないが、届いたとしてもアメリカへの出国間際であったはずである。山岸は「外国人との間に版権侵害問題を惹起した」と捉えているが、外務省から文部省への問い合わせには「瑞西カデルリー元南校御雇中著述致候独逸文法書今般翻刻相成過半不具之儘ニテ坊間売買相成候」で始まり、カデルリーが気にしていたのは版権のような問題もあったかもしれないが、「過半不具之儘ニテ」がポイントだったかもしれない。第2版以降は、基本的にドイツ文字で書かれているが、ドイツ文字でのエスツェットの使い方が大量に間違っている。Claße, laßen, gelaßen, eßen, gegeßen, freßen, gefreßen, vergeßen, meßen, gemeßen, müßen, wißen, Beßerungのような書き方をしているßはすべて間違っている。当時の南校の日本人教員にはまだエスツェットの使い方のような周辺的な文法規則まで理解していなかったひとがいたのではないだろうか。南校の文部省への回答は、余っ

た本は全部本人に返したとか、「右ハ小本ニテ種類モ異リ候ヤニテ全ク翻刻ト申スニハ有之間敷ヤト被存候」と述べていて、短縮して勝手に出版した本が種類も異なり翻刻ではないと苦しい言い訳をしている。

その後の南校文書に「カデルリーノ文法書ノ後日耳曼[16]ヨリ遥カニ卓絶セル文典書渡リタレバ今ニ至リ誰モカデルリー氏ノ文法書ヲ用ユル者無之候」と書いてあるのだという（山岸 1939b：388）。これでは、意味不明の言い訳を並べたうえに、腹立ち紛れの捨て台詞のようなものを南校文書には書き留めていることになるだろう。『カデルリー文典』は1886年版まであるわけであるし、新たにドイツから輸入されるようになった『シェーフェル文典』などが使われるようになっていくのは事実であるが、『シェーフェル文典』などはドイツ人の生徒向けの学校文法であって、本来外国語学習には不向きな文法書なので、『カデルリー文典』よりもはるかに優れているなどとは言えるものではなかったのである。母語を理解するための文法と外国語習得のための文法では当然内容が異なってくるはずであるが、当時はあまり意識されていなかったのかもしれない。一例をあげると、『カデルリー文典』では外国人がドイツ語を学習する上で最初に必要な項目として発音の解説をまず最初に詳しく扱っている。5ページめの音の分類（Eintheilung der Laute）から始まり、16ページめまでと[17]、かなり詳細なものである。ドイツで出版されていた学校文法の教科書では「発音」はこのような配置と扱いにはなっていない。架蔵本の『シェーフェル文典』（第7版、1868）で調べると、発音の説明が後半の第4章の「語形成と正書法」のところでわずかになされているだけである。ドイツ語を基本的に知っているドイツの生徒向けに文法を教える場合はたとえば発音について詳しく教える必要はないし、すでに発音はできるのであるから最初に教える必要もないということだろう。

それから、明治5年の当時、ドイツから学校文法の教材が輸入されるようになったので、カデルリーの文法書を用いる者がまったくいなくなったなどという南校文書の内容はまったく事実に反していたと思われる。『カデルリー文典』は1886年（明治19年）の版まで印刷されているわけであるし、「東大医学部予科では吉田謙次郎が明治12年11月から同13年12月の間、5等予科生に対してヘステルス第2読本によって読方と訳読の演習を行い、1学期にはカデルリー文典、2学期にシェーフェル文典を用いて講義している」（上村 2001：393）という記述からも分かる。

今日から見ると、標準的とは言えないような発音の記述をしていることも書

いておかないとカデルリーの肩を持ちすぎかもしれない。同僚のクニッピングが皮肉った内容を残している。これについては『回想記』のところでも触れるので、別の例をあげると、発音の差のないドイツ語の t と th について th の h は「ほとんど聞こえない」(fast unhörbar) という非科学的な説明をしているところも目に付くが[18]、カデルリーらしい説明の仕方になっている箇所は、語頭の sp- や st- の説明である。カデルリーは標準的とみなされる綴りの発音の仕方をとりあげ、そういう発音をする方言もあるが、間違いであると述べ、非標準的な発音をするように求めているのである。„sp und st werden fälschlich in einigen deutschen Mundarten im Anlaute wie Schp und Scht ausgesprochen; die richtige Aussprache ist die natürliche, nach der Zusammensetzung der Laute, also nicht Schprache, sondern Sprache; nicht schprechen, sondern sprechen; nich Schtein, sondern Stein; nicht Schtadt, sondern Stadt." (p.14).「sp と st はドイツ語の方言によっては間違って schp や scht のように発音されるが、正しい発音は音を合わせた自然な発音であり、Schprache ではなく Sprache であり、schprechen ではなく sprechen だし、Schtein ではなく Stein、Schtadt ではなく Stadt なのである」。カデルリーが間違った発音として糾弾しているのがドイツ語としての標準的な発音であったし、今でもそうである。しかし、何が標準的な発音かという問題は必ずしも容易なことではないし、明治初年にいち早くドイツ留学をし、帰国後にドイツ語教師になった崎山元吉の大正 8 年(初版が明治 22 年) の『独逸学捷径』(訂正 16 版) を見ても、「独逸語ハ Hannover 市ヲ中央トシテ其ノ周圍凡二十里以内ニ住スル人民ノ発音ヲ以テ正シキモノト為スハ世人ノ知ル所ナリ故ニ同地方ノ発音ニ依ル」と高らかに宣言しているが、Schwein に「シュヴァイン」と読みをつけているが、Stein には「スタイン」としていて、st- の発音の規則を今日のように教えていないことに驚かされるのであるから、カデルリーの発音の教え方が極端にひどかったわけではない。むしろ、明治 16 年に日本人として始めて簡単なドイツ文法書をつくった平塚定二郎の『独逸文法階梯 前篇 辞学』には発音解説がまったくないことを考え合わせるべきであろう。

ドイツ語の教育をしたことと『カデルリー文典』を執筆したこと以外のカデルリーの業績としては、当時まだ出版されていなかった独和辞典の編纂事業がある。独和辞典の編纂作業については、山岸 (1937a, 1939b) に書かれているが、当初大学南校内でカデルリーと相原重政が中心になって進めることになっていたが、どうしてもうまく行かず、外部のドイツ語学者に手伝ってもらうこ

とまでしたのであるが[19]、結局失敗してしまっている。作業の経過を示すものも残っていないようである。

『公文録』（明治3年・第61巻・庚午九月～閏十月・大学伺）には、「教導」の功績や「外教師雇入」及び「書籍買入」の周旋などの功績を理由に教頭のフルベッキに金20両の品を、カデルリーには金15両程の品を送りたいが、それでいいかという伺いが「庚午十月」（明治3年10月）に出されたことが記録されている。また、『公文録』（明治4年・第39巻・辛未五月～七月・大学伺）には、「嘗テ病気ニテ両足疾痛甚敷候節抔両杖ニテ教場へ出席勉強致」とある。したがって、カデルリーは熱心な教師であり、直接教育に関わらない職務においても学校から感謝されるような仕事をしたということであり、お雇い教師としてはかなり優秀だったのではないだろうか。

また、南校は高等教育機関ではなく、普通学を教える中等教育機関であったが、高等教育機関としての専門学校を作ろうという意向を明治4年に出来たばかりの文部省は早くから持っていたようである。「専門学校は文部省が乗り気で、フルベッキを法律講師、スイス人のドイツ語教師カデルリーと、当時は福井藩の教師だったグリフィスを理学講師として、東京の旧静岡藩邸で開校しようとした[20]」（大橋・平野 1988:266）。この件は実現していないが、これなどもカデルリーがかなり信頼されていたことの証拠だと思われる。

2．1991年に翻訳出版されたクニッピングの未公刊の自伝

クニッピングはカデルリー、ワグネル、ホルツの次に大学南校で雇用されたドイツ語のお雇い外国人であり、元は航海士で、後に日本の気象関係の仕事をし、日本最初の天気予報を出した人でもある。『回想記』でカデルリーについて触れている箇所は多くはないが、カデルリーの職業として「家庭教師(Hauslehrer)」をあげ、「シベリア経由で来日」とも書いていて、カデルリーの経歴に触れている箇所がある。あとで見るように、この二つの記述や来日時期などから『スイス歴史百科事典』や『ベルン伝記集』のJakob KaderliとJakob Kaderlyが同一人物に間違いないことが証明できるのである。なお、「家庭教師」といっても今日の大学生のアルバイトの家庭教師を思い浮かべるのは適切ではないだろう。むしろ、学校教育にも代わるような家庭教師であろう。家庭教師に頼るというのは様々な理由が考えられるが、軍の司令官や士官など家族連れで赴任するような場合、子どもの教育を家庭教師に頼るということは当時あったのだろう。「伝記」によれば、カデルリーはナポリ王国では士官の家庭で、ワルシャ

ワでは工場主の家庭で、ウラルのエカテリンブルクでは鉱山総監督の家で、ロシアのアムール川河口の都市ニコライエフスクでは司令官の家庭で家庭教師をしている。

『回想記』はオリジナルのドイツ語のものが公刊されていないので、訳の不明な点や訳されなかった内容については確認できない。「訳者まえがき」には「文意を損わぬ範囲で意訳要約した部分もある」ことや「冗長な箇所やどうしてもうまく訳せない部分は一部省略した」と書かれている。大学南校の時代のドイツ学の様子がお雇い外国人の立場から記述されている類書は他になく、貴重な文献である。以下、『回想記』からカデルリーが関係している部分をコメントを付けて引用しておこう。なお、引用に際しては訳者注として加えられたものはじゃまになる場合もあり、外してある。

「私はヴァグナーを通じてドイツ語学校に勤めたのであった。その頃その学校には、私たち二人のほかに、一人のスイス人、カデルリー（Kaderle）が勤務していた。」(p.87)。クニッピングは、カデルリー、ワグネル、ホルツに次いで、4人めとして大学南校に採用されたドイツ語担当のお雇い外国人教師である。ホルツの名前があがっていないのは、ホルツはプロイセン政府派遣で別格扱いだったためである。「一八七一年四月に上海でドクトル・ヴァグナーの電報を受取り、三人目のドイツ語教師に要請された時、私は三週間の休暇を取って、すぐ横浜に発った。」(p.100)。クニッピングはいわゆる現地採用のお雇い外国人だけを考えて三人目としているわけである。

「この学校では、年少の日本人たちに三つの重要な外国語を教え込まねばならず、教師は最初、他の学習に考慮を払う余裕がなかった。やがて、われらがスイス人カデルリーが家庭教師（Hauslehrer）としてシベリア経由で来日した。彼のドイツ語についての見解は、彼のドイツ文典の中でいみじくも述べているように、少なくとも不可解なものではなかった。彼はその中で、例えばFuchsはしばしば間違ってFuchsの代りにFuksと話されていると述べているが、基礎的知識のうわべを授けることには熟達していた。といっても、それは大したものではあり得なかったが。というのは、ドクトル・ヴァグナーがしばらくの間〔カデルリーと平行して〕クラスを持ったあと、カデルリーは引下って横浜で私塾を開かなければならなかったからである。」(p.102)。開成学校では最初からオランダ語は教えられていない。「Fuchsはしばしば間違ってFuchsの代りにFuksと話されている」のところはこの翻訳では分かりにくいが皮肉を述べたものである。カデルリーはドイツ語の発音について述べる際に自分の母語を基

準にしてしまったところがあるのだろう。Fuchs を Fuks と発音するのは標準的な発音なのである。また、「カデルリーは引下って横浜で私塾を開かなければならなかった」という部分であるが、カデルリーが塾主であったわけではない。0 章で書いたように、横浜にガス灯をつけたことでも知られる高島嘉右衛門の開いた学校で半年間教えたのである。カデルリーが南校に再雇用されなかった理由は不明であるが、クニッピングがほのめかしているような日本人側とのあつれきの証拠もない。

「私は差当りカデルリーに従属していたが、彼の退職した後はドクトル・ヴァグナーのやり方で、より自由に振舞うことができた。ヴァグナーの方針は、“ドイツ語をこなす”こと、つまりできるだけ多面的な教育をすることで、単に文法や読んだり作文することだけではなかった。カデルリーは学生（生徒）との付合いは、いわゆる下級教師、即ちいくらかドイツ語のできる日本人教師を介してなされるべきだとし、そう実行した。これは彼が望んだ仕事の軽減にはなった。」(p.102)。航海士として乗船していた船が売られてしまい、失業したクニッピングは、ワグネルに大学南校の仕事を紹介してもらっているし、クニッピングとワグネルがドイツ人でカデルリーはスイス人だということも考えると、クニッピングがカデルリーに対して批判的なことを書いていても割り引いて考えるのが妥当だろう。それに、ドイツ語の初心者の日本人学生に対して日本語を使ってでも直接教育しようとしたワグネルの方法と日本人教員の質を高めようとしたカデルリーの方法のどちらが優れていたかは、一概には言えないのでないだろうか。ワグネルが日本語も使ったことは「ドクトル・ヴァグナーは学生たちと直接意思の疎通を図り、会話を交すようにしたので、おかげで彼らはずっと速く上達した。それで私も早速日本語の勉強を始め、最初の年の夏に大いに励んだ。」(pp.103-104) の記述から推定できる。なお、カデルリーが「いわゆる下級教師、即ちいくらかドイツ語のできる日本人教師」のドイツ語にも配慮し、授業以外でも日本人教師の質問などに答えたことは、カデルリーについての公文書の記述「正課外教官質問相受け」(『公文録』、明治 4 年・第 39 巻・辛未 5 月～7 月・大学伺[21]) からも分かる。

「最初の年は、授業時間は九時から十二時までと、午後一時から四時までであった。私はそのあと、なお四時から五時まで助教師を教育しなければならなかった。一日七時間というのは日本の夏ではとても長い時間だった。というのは、午後になると気温はしばしば三十度を越すのである。カデルリーが退くとともに、この七時間制はなくなった。」(p.107)。この記述を読むと、クニッピン

グがカデルリーをけなしている理由の一つは、やはり、カデルリーの考えで日本人教員に対する追加の授業を持たされていたことがあるのではないかと思う。カデルリーが辞めたあとは、日本人教員に対する授業はやめてしまったようであるが、この点についてカデルリーを批判するのはおかしい。

3．変名で見つかったカデルリー関連文献とカデルリーの生涯

お雇い外国人でも帰国後に著名人になっていればインターネット上でも容易に検索できる。カデルリーの場合もまずはそういう可能性を考えてみた。しかし、カデルリーの場合はスイスで著名な日本学者その他の有名人にはなっていなかった。それどころか、日本を出てからスイスに帰国さえしていなかった。にもかかわらず、カデルリーの伝記が書かれていたのである。それは、カデルリーが普通の人とは異なる人生を歩んでくれたおかげでもある。19 世紀に書かれた伝記をもとに『スイス歴史百科事典』に Jakob Kaderli の項目が作られていた。カデルリーは日本では Jakob Kaderly で通していたが、変名だったようだ。カナダのスイス移民を扱う『オンタリオ州のスイス人』でもカデルリーが変名で出てきていて、今度は、Jacques Kaderli になっていた。

以下、新たに見つかったカデルリーに関連する資料の内容を見ながら、コメントすることにする。

3．1 『スイス歴史百科事典』（HLS）の Jakob Kaderli

以下全文を引用して、訳をつけてから、内容についてのコメントを付す。

Kaderli, Jakob

*22. 7. 1827 Limpach, †31. 12. 1874 Marseille, vermutlich von Mülchi. Nach der Dorfschule Bauernknecht, dann Soldat bei den Schweizer Truppen in Neapel. Rasche Auffassungsgabe und Sprachtalent verhalfen K. zu Stellen, u.a. als Hauslehrer erstmals in Neapel. Im Krimkrieg (1854-56) arbeitete er für die franz. Militärverwaltung. 1856 fuhr K. nach St. Petersburg und war dann Hauslehrer in Warschau. 1860 bereiste er England, Schottland und Irland, 1861-68 Sibirien. Dabei besuchte er in Swerdlowsk die Bergbau-Akademie sowie Bergwerke im Ural. 1868-72 erkundete K. China und Japan, 1872-74 Amerika und Kanada. Die Rückreise über Neufundland, Grönland und Island musste er 1874 wegen Krankheit abbrechen. In

Marseille begann K. mit den Aufzeichnungen seiner zwölfjährigen Weltreise, starb aber bald. Überliefert sind einige Reisevorträge und Gutachten zu Bergbaufragen.

Literatur

-Slg. bern. Biographien 3, 1898, 363-376

Autor：Anne-Marie Dubler

【訳】

カデルリー，ヤーコプ

1827年7月22日にリムパハ（Limpach）で生まれ、1874年12月31日にマルセイユで死去。家系はおそらくミュルヒ（Mülchi）[22]の出身。村の学校を終えた後、農家の下働きとして働き、その後、ナポリのスイス軍に入隊。物覚えが速く、語学の才能もあり、ナポリで家庭教師の職に付くことになった。クリミヤ戦争（1854-56）ではフランス軍本部で働き、1856年にサンクトペテルブルクに行き、それから、ワルシャワで家庭教師になる。1860年にイギリス、スコットランド、アイルランドを旅行し、1861年から1868年までシベリアを旅行する。スヴェルトロフスク（現在は旧名エカテリンブルクに戻っている）で鉱山学校に通い、ウラルの鉱山を見学してまわる。1868年から1872年にかけて中国と日本を調査（erkunden）する。1872年から1874年までアメリカとカナダに滞在する。ニューファンドランド島、グリーンランド、アイスランド経由での帰国は発病のために中止する。マルセイユで12年間の世界旅行の記録をまとめ始めるが、まもなく死去。旅行の講演記録や鉱山の鑑定書が伝わっている。

参考文献

『ベルン伝記集』(*Sammlung bernischer Biographien*)、第3巻、1898、363-376

著者：アンネ・マリー・ドゥーブラー

記載内容を見てみると、正確な来日時期については書いてないものの1868年から1872年にかけて中国と日本に来ていることになっているので、お雇い教師のカデルリーが日本にいた時期とおおよそ一致する。シベリア経由で来日している点や職業が家庭教師という記述があるが、これもクニッピングの書いているカデルリーの記述と合致している。したがって、Jakob Kaderlyの本名はJakob Kaderliであることが分かる。

『事典』の内容についていくつかコメントしておくと、著者はウラル地方を

シベリアに含めて考えていて、「1861年から1868年までシベリアを旅行」と書いているが、本来は、ウラル山脈がヨーロッパとアジアの境界であり、ウラル山脈の東側がシベリアである。「伝記」でもウラル地方をシベリアとは見なしていない。ウラルを出発して、シベリア放浪は5年間としている。ウラルを出発したのは1863年ということになるだろう。

「1868年から1872年にかけて中国と日本を調査（erkunden）する」の部分であるが、erkundenは「（軍隊の）偵察」や「（土地の）調査」のような意味になるようであるが、日本でドイツ語教師をすることがどうして調査することになるのかという疑問があるが、「伝記」のところでも詳しく見るが、これはカデルリーが周囲にそのように書いていたのである。それから、「1868年から」というのは『事典』の記事を書いたひとが「伝記」の内容を読み誤ったものと思われる。「伝記」にはアムール川の河口の都市ニコライエフスクに到着したのは1868年の秋であり、春になって航行が可能になるまでこの町で待機したことが書いてあるので1969年の春から1872年までのあいだに中国、日本を回ったのである。日本側資料から考えて日本へは明治2年6月（和暦の6月は西暦の7月9日から8月7日に対応）には来ていなければならないので、中国滞在はせいぜい数ヶ月程度で、かなり短期間であったはずである。

それから、「ニューファンドランド島、グリーンランド、アイスランド経由での帰国は発病のために中止する」という書き方では、少なくともニューファンドランド島を出発して途中で旅行をやめたことになると思われるが、これは「伝記」の記載を著者がやはり誤解したためと思われる。„Nach New-York zurückgekehrt, traf er Vorbereitungen, um im Frühjahr 1874 von Neufundland aus mit einem Wallfischfahrer nach Grönland überzusetzen, von wo er dann Island zu besuchen und über Norwegen und Schweden nach der Schweiz zurückzukehren gedachte. Sein kränklicher Zustand nötigte ihn jedoch, dieses Projekt aufzugeben und in dem milden Klima Italiens Besserung seiner Gesundheit zu suchen.“（「伝記」、pp.372-373）。「ニューヨークに戻ると捕鯨船でニューファンドランド島からグリーンランドに行く準備をした。1874年の春の予定だった。予定ではそこからアイスランドへ渡って、ノルウェーとスウェーデンを経由してスイスに帰国するつもりだった。しかし健康状態は思わしくなく、カデルリーはこの計画を断念して、イタリアに行き、温和な気候の中で健康が回復するのを待つことを選択せざるを得なかった。」計画自体を断念したのだから、おそらく、ニューファンドランド島にも行ってい

ないはずである。城岡（2006：82）でも『事典』の記載を元に「ヨーロッパに帰国のためにニューファンドランド島、グリーンランド、アイスランドを旅行中に発病し、旅行を1874年に中断した」と書いたが、これは間違っていたことになる。

3．2 『ベルン伝記集』第3巻の Jakob Kaderli

Sammlung bernischer Biographien（『ベルン伝記集』）はカントン・ベルン歴史協会の編集になるが、1884年に出版された第1巻冒頭にはどういう伝記を収録するか基本的な考え方が示されている。「この伝記集が収録を目指したのは、新旧を問わずカントン・ベルンで何らかの顕著な活躍をした人物の伝記やカントン・ベルン出身者でスイスの他の地域や外国での活躍によって故郷の名誉を守った人物の伝記である」。カデルリーの場合はカントン・ベルン出身者で外国での活躍によりカントン・ベルンの名誉を守った人物として伝記集に収録されているということだろう。それから、目次であるが、名前のほかに簡単な表現でその人物を紹介しているが、カデルリーの場合は Weltreisender、つまり「世界旅行家」という紹介の仕方をしている。

「伝記」はカデルリーが故郷に書き送った書簡やカデルリーを直接知る人の話からカデルリーの死後に A. ヴァルター（A. Walther）という牧師が作成している。カデルリーが手紙を書いていた村の牧師とは別の牧師（村の新しい牧師かもしれないが、不明）である。書簡は友人や知り合いにあてたものや、54年間リンパハ村の教師だったJ.[23]トイシャー（J. Teuscher）という名前の村の学校の恩師、ルートヴィヒ・ミュラー（Ludwig Müller）という名前の村の教会の牧師にあてたものだったようだ。なお、リンパハの教会の現在の牧師をしておられる方に問い合わせてみたが、現在のリンパハではどうやらカデルリーは忘却のかなたに完全に忘れ去れており、カデルリーの書簡も残されていないということだった。

「伝記」がカデルリーの書き送った書簡をもとにつくられているとすると、カデルリー自身が故郷の人たちに見せたい姿が描かれ、場合によっては自慢したい事柄が強調して描かれることになるだろう。本人の自己申告に基づく内容であるし、明らかなウソも混じっていると思われるが、過去の様々な資料が自由にインターネット上で検索できるようになれば別であるが、今のところ、どこまでが事実なのか確認するのは容易ではないと思われる。しかし、カナダのニピッシング湖沿岸部の調査のようにカナダ側の資料でも確認できるものもあ

るので、「伝記」の内容はまったく信用が置けないということもないようだ。

また、著者が牧師ということも「伝記」の内容に一定の偏向をもたらしているかもしれない。牧師として一般人に示したいカデルリー像がカデルリー自身の実像とは別のところにあったかもしれない。農家の下働きから身を起こした男の出世物語を牧師は皆の前に提示したかったのかもしれない。能力はあったが、生まれは貧しく、正式な教育は村の学校だけだったかもしれないが、不断の努力と引き換えに、ついには、世界へ飛び出し、北半球をぐるっと一周した立派な人物。故郷を出るときには故郷の土に口づけし、常に故郷を思い、故郷に何かあればどんなに離れていようともいつでも戻ってくる覚悟があり、少なくとも3年に1度は故郷に帰る計画を立て続けた人物。カデルリーはそのような人物として描かれているが、果たしてそれがカデルリーの実像であっただろうか。

以下では、「伝記」の中の事実関係を記述する部分を中心に、内容にコメントを加えながら、カデルリーの生涯をまとめておく。なお、「伝記」はドイツ文字で書かれているため、ラテン文字に変換して引用している。

スイスの寒村に生まれ、農家の下働きをするカデルリー

„Der schon im 48. Altersjahr den 31. Dezember 1874 abgeschlossenen Lebenslauf dieses Mannes stellt uns ein leuchtendes Beispiel dar, was aus einer tüchtigen Natur, die mit Talent Energie des Geistes, mit guter Auffassungsgabe Zähigkeit des Wollens und unermüdliche Arbeitslust verbindet, auch unter äußerlich ungünstigen Umständen werden kann. Geboren den 22. Juli 1827, aufgewachsen unter ärmlichen Verhältnissen im Dorf Limpach, im Amtsbezirk Fraubrunnen, ohne eine andere Vorbildung, als die, welche ihm eine freilich von treuer Hand geleitete Dorfschule geben konnte, hat sich Jakob Kaderli in eine Lebenssphäre emporgearbeitet, die weit ab von dem Ausgangspunkt seiner Laufbahn lag.“ (伝記冒頭、p.363)。

「カデルリーは1874年12月31日に48歳で亡くなっている。この人の生涯から私たちが容易に知ることができるのは、篤実な人は、才能があって精神のエネルギーがあり、優れた理解力があって意思の粘り強さや倦むことを知らない勤労意欲があれば、たとえきわめて不遇な状況に置かれていても、不遇な状況を克服できるということである。1827年7月22日にフラウブルネン郡リンパハ村の貧しい家庭に生まれ、村の学校に通うこと以上の教育は受けていないが、

カデルリーは人生の出発点よりもはるかに高いところまで登りつめたのである。」„Nach seinem Austritt aus der Schule, in welcher er sich vor allen Mitschülern durch Fähigkeit und Lernbegierde, aber auch durch unbändige Lebhaftigkeit ausgezeichnet hatte, sah er sich, mittellos wie war, genötigt, sich sein Brot als Bauernknecht zu verdienen. Einige Zeit diente er im Waadtlande; dort lag er während des Tages seiner Händer Arbeit ob, des Abends besuchte er Fortbildungsschulen; der französische Sprache hatte er sich bald so weit bemeistert, daß er sich mit Gewandtheit mündlich und schriftlich in ihr auszudrücken vermochte.“ (p.363)。「学校では能力や学習意欲の点ですべての同級生を凌駕していたが、押さえのきかない元気のいいところも目立つ生徒だった。卒業後は家が貧しかったので、農家の下働きを余儀なくされた。しばらくはヴォー州[24]で働き、そこでは日中は仕事で忙しかったが、夜は補習学校（Fortbildungsschulen[25]）に通った。フランス語には上達して、話し言葉も書き言葉もたくみにあやつることができるようになった。」

ナポリ王国の傭兵になったカデルリー

正確にはいつのことか書いてないが、カデルリーは、「若気のいたりで」(ein Schritt jugendlicher Unbesonnenheit)、ナポリ王国のスイスの傭兵部隊に入隊する（der Jüngling ließ sich unter die Schweizer Truppen in Neapel anwerben)。後続の記述を読むと、ナポリとシシリアで1848年、1849年の戦いに加わったことが書かれているから、スイス傭兵部隊入隊はそれ以前のはずである。当時、ナポリ王国ではフェルディナンド2世がナポリの暴動を鎮圧し、シチリアを取り戻しているから、スイス傭兵部隊はこれらの戦いに関わったものと思われる。スイスは1840年には傭兵部隊の新たな派遣を禁止していて、契約が継続中のナポリ王国への派遣が最後になったようである。したがって、カデルリーが参加したのはこの最後のスイス人傭兵部隊である[26]。

兵士としてのカデルリーは、ナポリで目覚しい活躍を見せたようであるが、軍隊生活には満足していなかったようである。„Die scharfe Zucht, welcher er sich in Neapel unterziehen mußte, und mehr noch das einförmige Garnisonsleben, die Beschäftigung mit mechanischen Exerzitien waren aber durchaus nicht nach dem Geschmack geistig geweckten und freien, unabhängigen Natur. Zwar in den Kämpfen der Jahre 1848 und 1849 in Neapel und Sizilien, an welchen die Schweizerregimenter und vorab das

Bernerregiment einen so hervoraragenden, für ihre Waffenehre rühmlichen Anteil nahmen, zeichnete er sich durch todesverachtende Tapferkeit aus, so daß er zum Unteroffizier befördert wurde; er selber legte aber das bescheidene Geständnis ab, was ihm damals als Bravour ausgelegt worden, sei im Grunde nichts als Lebensüberdruß gewesen, er habe den Tod gesucht, aber, während Kameraden rechts und links gefallen, habe keine Kugel den Weg zu ihm, dem Lebensmüden gefunden.“ (p.364)。「ナポリの軍隊の厳格な規律、単調な駐屯地での生活、機械的な軍事教練、こういったものは、覚醒した精神を持ち、自由で独立した人間であるカデルリーの気に入るはずはなかった。ナポリとシシリア島での1848年と1849年の戦いではスイスの連隊、とくにカントン・ベルンの連隊が武運をあげ活躍したが、このときカデルリーは死をも恐れぬ勇敢さで戦い、見事、下士官まで昇進している。控えめな彼自身の言葉によれば、勇敢と人に思われたことは実は生きるのが嫌になっていただけのことで、まわりの戦友が次々に戦死していくのに、死ぬつもりでいた自分を弾の方が避けてくれたのだと述べている。」

ナポリで除隊後に家庭教師になったカデルリー

ナポリ王国で軍隊生活を送る一方で、カデルリーが関心や才能を早くも他に向け始めたことについて「伝記」は触れている。„Doch verstrichen die Jahre des Soldatenstandes nicht unbenutzt. Der neapolitanische Soldat, der sich im Rock Seiner Majestät des Königs Ferdinand so beengt fühlte, benutzte alle Mußestunden mit dem größten Fleiße zu seiner Ausbildung und zur Vermehrung seine Kenntnisse. Nach Ablauf seiner Dienstzeit erhielt er in der Familie eines Offiziers, dessen Aufmerksamkeit der talentvolle, strebsame junge Mann auf sich gezogen hatte, eine Anstellung als Hauslehrer. Er verließ dieselbe im Jahre 1854.“ (p.364)。「カデルリーはフェルディナンド王のもとでナポリの兵隊として過ごすことが窮屈に感じられるようになり、軍務のあい間をぬって、教養を付け、知識を増やすことに最大限の努力を払った。除隊前からカデルリーの有能さと努力家ぶりを買っていた士官の家で除隊後に家庭教師になった。カデルリーは1854年にこの家庭を離れている。」ナポリを出るのが1854年で、没するのが1874年であるから、この時から、20年を旅の空の下で過ごすことになる。

クリミヤ戦争の途中からフランス軍で働いたカデルリー

たまたま乗った船でフランスの戦争委員（Kriegskommissär）と知り合いになり、この関係から士官待遇でフランス軍の管理部の幹部に迎えられることになった。コンスタンティノープルで数ヶ月働いた後、志願してクリミア半島に行くことになった。騎兵師団の会計係の補佐として（als Adjunkt des „Comptable“ eines Cavalleriedivision）働くことになり、任務のためクリミア半島から3回の大きな旅行をこなすことになった。一回めがアレクサンドリアとカイロへの旅行、二回めがスミルナ（Smyrna[27]）への旅行、三回めがトラペズント（Trapezunt[28]）とエルズルム（Erzerum）までの旅行である。「伝記」には軍務についているあいだも、努力家のカデルリーは寸暇を惜しんで英語とトルコ語の勉強をしたことが書いてある。トルコ語については、主計長（Intendant）が馬や牛の購入のためにトルコ内陸部に出かけるのを書記兼通訳として（als Sekretär und Dragoman）随行できるくらいにはなったのだという。クリミヤ戦争が終わってからアルジェリアの士官ポストの話もあったのだが、カデルリーは断ったようだ。戦争はもう沢山だと感じていたのと、これまでの敵だったロシアを見聞したいと感じるようになっていたらしい。1856年の初夏にモスクワの皇帝の戴冠式に出かけるアテネの若者たちといっしょに馬でコンスタンチノープルからモスクワに向かった。当時盗賊がうようよしていたバルカン半島は8人のトルコ憲兵（Cavassen）に護衛されて安全に通過した。シュムラ（Schumla）を出たあとは、ブカレスト、それからヤシ（Jassy）を通ってベッサラビアをオデッサに向かった。そこから、一団はキエフ、オーレル（Orel）、トゥーラ（Tula）を通ってモスクワに着いた。しかし、カデルリーはモスクワには長居はしないで、見物するものを見たら、サンクトペテルブルクに汽車で向かった。サンクトペテルブルクでは裕福なポーランドの工場主と知り合いになって、その関係で、ワルシャワで工場主の一人息子の住み込みの家庭教師（als Gouverneur seines einzigen Sohnes）になったようだ。カデルリーという人はどうやら自己宣伝がなかなかうまかった人のようである。有利な条件だったことも「伝記」は伝えている。結局、教養ある人たちとつきあいながら、ワルシャワで約2年間暮らすことになった。そろそろまた旅行がしたくなってきて、プロイセン、ベルギー、フランスを通ってスイスに帰国することも考えていた矢先、事件は起こった。

ワルシャワのフランス総領事館での領事との衝突・逃亡

クリミア戦争の途中からフランス軍側で働いていたカデルリーは、最後はコンスタンチノープルのフランス軍の派遣部隊の管理任務についていたようであるが、ここを辞めるときに、ロシア旅行のためにフランスのパスポートを発行してもらっていた。„Schweizer unter französischem Schutz“（フランスの保護を受けるスイス人）という資格だったようだ。ところが、ポーランドのワルシャワのフランス総領事館でパスポートにビザの交付を受けようとしたところ、ろくな説明もされずにパスポートを没収されてしまった。フランスのパスポートを没収するということは、共和主義者というだけで当局からにらまれ、警察の標的にされるような国で彼の保護を打ち切るということを意味する。顔見知りになっていた領事館の書記がほのめかすには、領事[29]が最近になってパリから秘密の指示を受け取っていて、スイスがフランスの要求を拒否したことに対するある種の報復措置ではないかということだった。フランスの要求というのは、フランス皇帝（ナポレオン三世のことか）を脅かすような行動を監視するためにスイスの主要都市にフランスの警察官を配備したいという要求だったようだ。この件では領事にもう一度会いに行っているようであるが、やはり、書記のほのめかした理由のようなことがあったようである。„Bei einer nochmaligen Audienz gab in der That der Konsul Kaderli die Erklärung, daß es ihm verboten sei, für die Zukunft Fremde und besonders Schweizer unter französischen Schutz zu nehmen.“ (p.367)。「事実、再度の領事との接見の場で、領事は、外国人特にスイス人をフランスが保護することは今後は禁止なのだとカデルリーに説明した」。カデルリーはスイスのパスポートを持っていなかったのか、スイスのパスポートよりもフランスのパスポートの方が効き目があったのか、その辺は「伝記」には書いてない。いずれにしても、カデルリーは強硬に抵抗したようで、スイスの新聞に訴えるぞとまで言って食い下がったようだ。カデルリーの強硬な抗議に対して、フランス領事も警察官を呼んでカデルリーを逮捕させようとしたようだ。「伝記」の内容だけでは領事の横暴な行動が分かりにくいが、コサック人（勇敢なことで知られる）の警官二人が呼ばれて、なにやら逮捕令状のようなものが渡されたようだ。ちょうどその時であった。カデルリーはまだ体勢を整えていない警官の一人からサーベルを奪い、左手で首を押さえ、右手の奪ったサーベルの柄で警官のこめかみを打った。警官は倒れた。もうひとりの警官がカデルリーの方へ見返ったときには、カデルリーは

警官から二歩離れた位置まで来ていて、警官がサーベルに手をかけようとしたときには、カデルリーの方が早く、サーベルを握っている右手と左手の両方で警官の胸を思いっきり殴った。警官は領事に倒れかかり、二人とも床に倒れてしまった。カデルリーの思わぬ攻撃によって生じた混乱の隙に、総領事館を出て、暗闇と雑踏の中にまぎれて逃げた。その後、辻馬車をつかまえ、町外れまでは行ったものの、どうしていいか分からない。結局、知り合いになっていたポーランドの伯爵（Graf）が近くの城に住んでいたので、思い切って、そこへ行くことにした。伯爵はかくまってくれただけでなく、逃亡のための援助の手も差し伸べてくれた。「伝記」では dieser, nicht nur dem Stande, sondern auch der Gesinnung nach ein Edelmann（「高貴な（貴族）階級であるだけでなく、高貴な信念を持つこの人」）と伯爵を持ち上げている。カデルリーの住居だったところには既に6人の兵隊を連れた警部が武器を持ったスイス人の捜索に現れていたくらいであるから、ポーランド内にとどまることはできなかった。伯爵はカデルリーにひげを剃らせ、猟の服装をさせ、乗り換えのための4頭の早馬と従者の猟師をつけて、ワルシャワから逃亡させた。「伝記」では、この後国境を越えることに成功して、トルン（Thorn[30]）につくと伯爵の友人の城で暖かく迎えられたことまで書いている。フランス領事の悪漢ぶりといい、カデルリーの勇敢さといい、かくまってくれた伯爵の高潔な態度といい、本当にこのようなことがあったのかどうかは分からない。それに、一方の当事者のカデルリーが故郷に書き送った手紙の内容を元にしているわけだから、カデルリーに都合のいいように事実が改変されている可能性もあるだろう。

1860年、1861年のイギリス、スコットランド、アイルランド滞在

ワルシャワでお尋ね者になってプロイセン領のトルンに逃げ延びたカデルリーであったが、「伝記」ではその後の記述がしばらく欠けていて、次の記述は1860年から1861年にかけてのイギリス、スコットランド、アイルランドへの旅行である。

„In den Jahren 1860 und 61 finden wir Kaderli in England, Schottland und Irland. Daselbst bot sich reichlich Gelegenheit , die Lücken seines Wissens immer mehr auszufüllen. Nicht nur vervollkommte er sich in der Kenntnis der englischen Sprache, so daß er sie mit voller Freiheit beherrschte, ganz besonders war es das Studium der Geologie und Mineralogie, dem er mit aller Energie sich widmete. Längst schon hatte ihn diese Wissenschaft

angezogen. Dieser Neigung ließ er nun freien Lauf, Vorlesungen wurden angehört, die Meneraliensammlungen des britischen Museums und der Museen von Dublin und Edingburg besucht.“ (p.368)。「1860年、61年にカデルリーはイギリス、スコットランド、アイルランドに滞在した。知識・教養の欠けているところを補うにはよい機会となった。英語の勉強だけではなかった。完全に自由に英語が使いこなせるようになったのは言うまでもないが、地質学や鉱物学の分野の研究にカデルリーは精力を傾けた。この分野の学問にずいぶん以前から惹かれていたのだが、この時になって、カデルリーは没頭して、講義を聴き、大英博物館やダブリンやエジンバラの博物館の鉱物コレクションを訪ねてまわった。」

イギリス滞在中のことであるが、希望を打ち砕くような、何かしら心の痛みを伴う経験をしたようで、そのため、詩作をしたことが「伝記」に書かれている。日本のお雇い教師カデルリーが詩を書いたことは、『カデルリー文典』からも裏付けられる。後半には読章の部分があって、読み物や詩があるが、ゲーテやシラーなどの詩にまじって、作者Kの詩があり、従来からカデルリー作だと推定され、「Kなる人の作一つがある。Kとは編者自身の匿名でもあろうか。」(『日独言語文化交流史大年表』、p.482) と書かれている。

「伝記」ではこの時期から地球を一周しようという計画をカデルリーが意識しだしたことについて書いている。しかも、熱帯の国々ではなく、不毛なシベリアを通って行きたいと考えたのだという。カデルリー自身が後に手紙の中でこの時の気持ちを分析しているらしいが、「北国の何もない孤独の方が色彩と生命にあふれる南国よりも当時の自分の気分に合っていたのだろう」(„Die kahle Einsamkeit des Nordens harmonierte besser mit seiner damaligen Gemütsverfassung, als die Farbenpracht und Lebensfülle des Südens.“、p.369) という思いだったようだ。

ウラル、シベリアを旅行するカデルリー

1861年にカデルリーはハンブルク、ベルリン、ケーニヒスベルクを通ってロシアに向かった。サンクトペテルブルクに向かう郵便馬車で深い森の夜道を走っていたのだが、馬が狼の遠吠えに恐れをなし、暴れ、カデルリーは馬車から投げ出され、大怪我をしてしまう。

„Als er nach einigen Wochen so weit hergestellt war, um seine Reise nach Petersburg und Moskau fortsetzen zu können, fand ein russischer

Polizeikommisär große Aehnlichkeit zwischen ihm und einem Mitgliede der polnischen Agitationspartei, die damals gerade die bald darauf ausbrechende polnische Revolution organisierte und hauptsächlich auch in Lithauen sehr thätig war. Er wurde verhaftet und erst nach vier Tagen, nachdem er sich über den Zweck seiner Reise genügend ausgewiesen hatte, wieder in Freiheit gesetzt." (p.369)。「サンクトペテルブルクとモスクワへの旅行が続けられるまでに健康が回復するのに数週間かかった。その頃ポーランドの扇動政党でまもなく始まろうとしていたポーランド革命を組織して、主にリトアニアで活動していた政党があったが、党員の一人とカデルリーが非常によく似ていると考えたロシアの警部がいて、カデルリーは逮捕され、旅行の目的を十分に説明して、釈放されるまで4日間かかった。」

„Nach einem kurzen Aufenthalt in Petersburg und einem Ausflug nach den Ladoga- und Onegaseen reiste er über Moskau nach Nischni-Nowgorod und von da an Kasan. Ein Dampfer brachte ihn hierauf nach Perm und Postpferde nach Jekaterinaburg am östlichen Abhange des Uralgebirges, wo er sich ungefähr zwei Jahre zu praktischen geologischen und mineralogischen Studien in den dortigen Bergwerken aufzuhalten gedachte. Empfehlungen von Petersburg an den General Josse, Generaldirektor der uralschen und altaischen Bergwerke, verschafften ihm eine gute Aufnahme in den gebildeten Kreisen der ural'schen Hauptstadt. Er wurde Hauslehrer in der Familie eines Bruders des Generals und besuchte gleichzeitig die Bergakademie, wo er sich besonders auch auf das Studium der Chemie, soweit die Mineralogie es erforderte, legte. Teils mit seinen Zöglingen und ihrem Vater, der Oberinspektor der Bergwerke war, teils allein während der Ferienwochen besuchte er die wichtigsten Bergwerke der ganzen Uralkette und studierte die geologische Formation dieses wichtigen und reichen Gebirges, sowie auch die Systeme der Ausbeutung seiner Schätze. Nach einem zweijährigen Aufenthalt am Ural glaubte er sich hinlänglich vorbereitet, seine Reise fortzusetzen." (pp.369-370)。「サンクトペテルブルクに短期間滞在して、ラドガ湖やオネガ湖への旅行をしたが、その後、モスクワ経由でニージニーノブゴロド(Nischni-Nowgorod)へ行き、そこからカザン(Kasan)へ行った。それから、蒸気船でペルミ（Perm）へ行き、郵便馬車でウラル山脈の東側斜面にあるエカテリンブルクに向かった。ここで2年ほど滞在し、実用

的な地質学と鉱物学の研究をウラル地方の鉱山で行うつもりだった。ウラル地方とアルタイ地方の鉱山の総支配人をしているヨセ（Josse）将軍あてにサンクトペテルブルクで書いてもらった推薦状が役に立ち、カデルリーはウラルの首都のエカテリンブルク（Jekaterinaburg）で教養ある人びとの間で歓迎を受け、将軍の兄弟の家族のもとで家庭教師をすることになった。傍ら、鉱山学校（Bergakademie）に通い、とくに鉱物学（Mineralogie）に必要な化学の研究に打ち込んだ。家庭教師先の子供たちといくつもの鉱山の総監督（Oberinspektor）をしている父親といっしょにウラル山脈の重要な鉱山を見て回った。休暇中は一人で行ったりしたのだが、こうしてカデルリーはウラル山脈の重要な鉱山はことごとく見て回った。そして、この重要で豊かな山脈の地質学的な構成や鉱物資源の活用方法を調査・研究した。ウラル地方で2年間過ごしたのであるが、カデルリーには旅を続けるときが来たと感じられたのだった。」

その後、5年間、シベリア各地を転々とするが、『伝記集』はイルクーツク以外の都市名はあげていない。「伝記」ではカデルリーの関心が主に地質学的、鉱物学的なものだったことにも触れている。モンゴルや満州地域（中国東北部）との国境地帯や北部の氷に覆われた地帯を歩き回ったとは書いているが、5年間の詳細は不明である。とにかく、ウラルを出発してから5年後の1868年の秋にはシベリアを横断してアムール川の河口の町ニコライエフスク（Nikolajewsk）までたどり着いている。

中国経由で来日、離日してアメリカに向かうカデルリー

伝記のここからしばらくは日本滞在中の記述やその前後の記述なので、該当する部分を省略せずにすべて引用しておきたい。

Im Herbst 1868, fünf Jahre nach seiner Abreise vom Ural erreichte Kaderli die Küste des Stillen Meeres. Die gesunde Lust von Nikolajewsk an der Amurmündung, wo er über den Winter bis zur Wiedereröffnung der Schifffahrt als Lehrer im Hause des Militärgouverneurs des Küstengebietes und zugleich Kommandanten der russischen Flotte im Stillen Meere verweilte, stellte seine durch die Strapazen der sibirischen Reise auf's Aeußerste erschütterte Gesundheit so weit her, daß er es wagen durfte, seine Reise "um die Erde" fortzusetzen. China war sein nächstes Ziel. Außer Hongkong und seiner Umgebung besuchte er Shanghai und

befuhr auf eine Strecke die beiden Hauptflüsse Chinas, den Hoang-Ho und den Jangtse-Kiang. Ausgebrochen Unruhen in Tiensin ließen es für einen Europäer nicht ratsam erscheinen, die Hauptstadt Peking zu besuchen. Er schiffte sich deshalb nach dem japanischen Inselreich ein, das er sich zu einer Hauptstation ausersehen hatte. Ueber zwei Jahre verweilte er in diesem mächtigen aufstrebenden Lande. Seine Bekanntschaft mi dem Rektor der Akademie in Jeddo, wie damals Tokio genannt wurde, vermittelte ihm eine Berufung an diese Anstalt als Lehrer naturweissenschaftlicher Fächer. Seine Stellung als Staatsbeamter gestattete ihm, unter dem Schutz der Regierung mehrere Reisen in's Innere des Insellandes zu unternehmen, die reiche geologische und mineralogische Ausbeute einbrachten.

Am 22. Juli 1872, an seinem sechsundvierzigsten Geburtstage, schiffte er sich auf dem amerikanischen Postdampfer nach Amerika ein. Als wertvollsten Ertrag seines Aufenthaltes in Japan brachte er eine große 1580 Exemplare zählende, wo möglich alle mineralogischen Produkte Japans enthaltende Sammlung über den großen Ozean. Die japanische Regierung hatte sich umsonst bemüht, ihm dieselbe abzukaufen. In San Francisco schloß er mi dem großen Woodward'schen Museum daselbst einen Kontrakt, dem zufolge er diesem seine Sammlung für einige Jahre zur Ausstellung überließ. (p.371)

「1868年の秋、ウラルから出発して5年後にカデルリーは太平洋岸[31]までたどり着いた。アムール川河口のニコライエフスクで、春になって船の航行が可能になるまでの間沿岸地帯の最高司令官でありロシア太平洋艦隊の指揮官である人のところで家庭教師として一冬を過ごした。シベリア旅行で極度に疲弊した健康状態であったが、健康は回復し、地球一周旅行を続行することになった。中国が次の目的地だった。香港とその周辺以外では上海を訪ね、中国の二大大河黄河と揚子江を船で旅行した。天津での暴動の勃発のためヨーロッパ人として北京へ行くことが得策だと思えなかったカデルリーは北京行きを断念した。それで、次の主要滞在地として選んだ日本への船に乗ることにした。カデルリーは2年余り（ueber zwei Jahre）をこの強大な発展途上の国で過ごした。江戸は当時東京と名づけられていたが、江戸の学校（Akademie）の校長[32]の仲介で自然科学科目の教員として（als Lehrer naturweissenschaftlicher Fächer）この施設に雇用されることになった。国家公務員としての立場のおかげで政府

の庇護を受け、日本の奥地への旅行を何度も断行し、地質学上や鉱物学上の実り豊かな成果（die reiche geologische und mineralogische Ausbeute）をあげることができた。

カデルリーは1872年7月22日にアメリカの郵便船に乗った。この日は彼の46歳の誕生日であった。日本滞在中の最大の成果として1,580点もの鉱物、ひょっとしたら日本に存在するすべての鉱物を網羅した鉱物標本の大コレクションを携えて太平洋を渡った。日本政府はこの鉱物標本の買取りを希望したが果たせなかった。アメリカに渡ってからカデルリーはサンフランシスコのウッドワード博物館とのあいだで契約を交わし、鉱物標本を展示用に数年間貸与した。」

「2年余り（ueber zwei Jahre）をこの強大な発展途上の国で過ごした」と書いているが、滞日期間は、実際は、もっと長いはずである。開成学校への採用が明治2年6月で、横浜の市学校との契約が切れるのが明治5年6月であるから、少なくとも3年程度の滞日期間はあったはずである。

「カデルリーは1872年7月22日にアメリカの郵便船に乗った」とあるが、郵便船（Postschiff）とはP.M.社（Pacific Mail Steamship Company、「太平洋郵船」、「太平洋郵便汽船会社」）のことで、当時、横浜からサンフランシスコに向かうものは月に一度の定期便だった。カデルリーは明治5年1月から6ヶ月間の契約を高島嘉右衛門としていることが『資料御雇外国人』の記述から分かるが、1872年7月22日は明治5年6月17日だから、契約の終了とほぼ同時に日本を離れ、月に一度のサンフランシスコ行きの船に乗ってアメリカに渡ったことになる。

アメリカとカナダのカデルリー

翌年の1873年の初頭には少し遠出して、北カリフォルニア、オレゴン、ワシントンを超えて、ブリティッシュコロンビアへの旅行をおこなった。ブリティッシュコロンビアでは土地の団体の依頼を受けて、バンクーバー島の奥地への地質学調査を指揮した（„er [. . .] unternahm im Auftrage eines dortigen Gesellschaft die Führung einer geologischen Expedition in's Innere der Vankouver-Insel“、p.372）。詳細な報告書を書いていると「伝記」は述べているが、依頼を出した団体名も書誌情報も「伝記」にないのが惜しまれる。バンクーバー島の調査から、いったん、サンフランシスコに戻ってから、今度は、東へ向かい、モルモン教徒の土地であるグレートソルトレーク地方へと向かった。

鉱物資源の豊かなワサッチ山脈には雪がまだ残っていたが、カデルリーは軽テントで過ごしたために肺炎(Brustentzündung[33])になり、ソルトレークシティーでしばらくの療養を余儀なくされたようである。健康がいくらか回復してからカデルリーはオハイオ州に向かう。スイスから母と姉妹が移住してきているはずだった。「伝記」には父親への言及が最初からまったくないので、カデルリーの家は母子家庭だったのかもしれない。姉妹の数は明記されていないが、複数形で書かれている。

„Notdürftig hergestellt, reiste er nach dem Staate Ohio, wo er Mutter und Schwestern, die unterdessen nach Amerika ausgewandert waren, wiederzusehen hoffte. Er kam zu spät: die Mutter war gestorben; die Schwestern fortgezogen.“ (p.372)。「体調がそこそこ回復するとカデルリーはオハイオ州に向かった。オハイオ州には母とカデルリーの姉妹が移住してきているのだ。再会できるものと行ってみたのだが、母は死んだ後で、姉妹はすでにその土地を後にしていた。」

„[. . .] er [. . .] beschäftigte sich einige Wochen mit geologischen Studien am Uta, dem Flusse zwischen dem Ontario und dem Erie-See und wählte hierauf Toronto in Kanada zu seinem zeitweiligen Aufenthalt. Von hier aus unternahm er im Interesse schweizerischer Einwanderung nach Kanada einerseits und der Provinzialregierung andrerseits eine Erforschungsreise nach dem Nipissing-See, an dessen südlichen und südöstlichen Ufern die Regierung ein Areal von einigen hundert englischen Quadratmeilen schöner Waldungen mit gutem Ackerboden zu einer künftigen Kolonie für Einwanderer aus der Schweiz ausgesetzt hatte.“ (p.372)。「オンタリオ湖とエリー湖の間を流れるユタ川で数週間にわたって鉱物学の調査研究を行い、この目的のためにカナダのトロントにしばらく滞在した。さらに、ここトロントからニピッシング湖へ調査に出かけている。カナダへのスイス移民のための調査であり、州政府のための調査であった。ニピッシング湖の南岸から南東岸にかけて政府は数百マイル（イギリスマイル）の土地をスイス移民のための移住地として提供を約束していたのである。」

カデルリーがニピッシング湖への調査に実際に出かけたことは次節の『オンタリオ州のスイス人』のところで詳しく見る。「伝記」にはいつのことなのか書いてないが、『オンタリオ州のスイス人』によれば、1873年11月3日に出発して、4日後にはニッピシング湖に近いJohn Beattyの農園に調査団の一行(カデ

ルリーと3人の農夫と案内のガイド1人）は着いている。

アメリカに渡ってからのカデルリーの活動で忘れてならないのは、シベリアや日本についての講演を行っていることだろう。「伝記」の著者もいつどこで行われたのか正確な情報は持ち合わせていないようであるが、„Vergangenheit, Gegenwart und wahrscheinliche Zukunft abendländischer Kultur in China und Japan“（「中国と日本における西洋文明の過去と現在と予想される未来」）、„Sibirien und seine Bewohner“（「シベリアとその住民」）という講演をニューヨークで行ない、ニューヨークの新聞にも掲載されたと述べている（「伝記」、p.374）。シベリアについては、„Die Verbannten in Sibirien“（「シベリアの流刑者」）という講演もニューヨークで英語で行い、好評だったと「伝記」に書かれている（p.371）。ニューヨークで行ったという講演については、将来、過去の新聞情報などが自由に検索できるようになれば、もっと詳しく調べることができるかもしれないが、今のところ、確認はできていない。

「伝記」では、モントリオールからボストンまでアメリカ動物学の父といわれるハーヴァード大学教授ルイ・アガシー（Louis Agassiz 1807 — 1873）を訪ねたことなどにも触れている。サンフランシスコで知り合い、ボストンに会いに行ったところ、アガシーはすでに死の床にあったと述べている。したがって、これは1873年だったはずである。アガシーはスイス出身の著名な学者で、カデルリーは同郷の学者に会いに行ったわけである。東京大学初代動物学教授になるお雇い教師E.S.モースはハーバード大学時代アガシーのもとで学生助手をしているから、アガシーはお雇い教師とは縁がある学者であった。

ヨーロッパに帰り、マルセイユで死去するまでのカデルリー

„Am 3. Juni 1874 betrat er nach Vollendung seiner zwölfjährigen Reise um die Erde in Cherbourg wieder den europäischen Boden.“ (p.373)。「1874年6月3日に12年間の世界周遊の旅を終え、カデルリーは、シェルブールでヨーロッパの土を再び踏むことになった」。シェルブールからどういうルートかは分からないが、イタリアにまず入ったようである。療養が目的でまずジェノバに行き、その後、やはり療養の目的でマルセイユに向かった。

故郷に送った手紙には居ても立ってもいられないくらいに故郷に帰りたいようなことも書いているが、将来計画にも書いていたようだ。„Vorläufig beabsichtigte er, an der Akademie von Aix eine ihm angebotene Lehrstelle zu versehen, dann gedachte er sich bleibend in New-York niederzulassen, wo ihm eine

Stelle in der Redaktion eines der bedeutendsten Blätter in Aussicht stand." (p.373).「とりあえず、エクス（Aix、エクサンプロバンス）の学校（Akademie）で彼に申し出のあった職につき、その後ニューヨークに腰を落ち着けるつもりだった。ニューヨークでは重要な新聞の一つから、編集部の仕事が得られる見通しがあったのである。」

結局、計画は実現されずに、1874年12月31日にマルセイユの病院でカデルリーは死去した。死因は肺炎（Lungenentzündung）だったようだ。ドイツ・プロテスタントの牧師が病院に到着したときにはすでに意識不明で、遺言を残すこともなく、世界を駆け巡ったときと同じ孤独さのうちに彼は死んだ、と「伝記」は書き記している。

3．3 『オンタリオ州のスイス人』の Jacques Kaderli

1870年代にカナダのオンタリオ州へのスイス人移民を精力的に仲介する仕事をした女性がある。エリーゼ・フォン・ケルバー男爵夫人（Elise von Koerber）というドイツのバーデン公国出身の未亡人である。彼女はカナダ政府やオンタリオ州政府と交渉し、また、ヨーロッパまで出向いでカナダ移民の宣伝活動をし、農民、時計工、家政婦、孤児などをカナダに送り込んでいる。"By the end of 1875 she had 400 immigrants to Canada, the majority of them Swiss."(p.90)。エリーゼ・フォン・ケルバーは1875年末までに400人の主にスイス人からなる移民をカナダに送り込んだのであるが、カナダの国勢調査の出身国に彼女の活動の結果を見ることができる。1871年にはカナダ全体で2,963人のスイス出身者がいて、そのうちオンタリオ州は950人だったのが、10年後の1881年にはカナダ全体で4,588人のうちオンタリオ州が2,382人と過半数を超えるまでになっているのである（p.243)。

じつは、アメリカからカナダに渡ったカデルリーはエリーゼ・フォン・ケルバーと知り合いになっていて、カデルリーは彼女の依頼でスイス人移民のための土地の調査をしているのである。この調査旅行については「伝記」にも記載されているし、調査自体は事実だったと思われる。

„Von hier (=Tronto) aus unternahm er im Interesse schweizerischer Einwanderung nach Kanada einerseits und der Provinzialregierung von Ontario andrerseits eine Erforschungsreise nach dem Nipissing-See, an dessen südlichen und südöstlichen Ufern die Regierung ein Areal von einigen hundert englischen Quadratmeilen schöner Waldungen mit gutem

Ackerboden zu einer künftigen Kolonie für Einwanderer aus der Schweiz ausgesetzt hatte.“（「伝記」、p.372)。「ここ（トロント）を基点にしてスイス人のカナダ移民とオンタリオ州政府の両者のためにニピッシング湖への調査旅行を行なった。ニピッシング湖の南側と南東側の土地は良い耕地の付いた数百平方イギリスマイルの素晴らしい森林地であったが、政府は将来のスイス移民のための移住地とすることを約束していた土地である。」

「伝記」の書き方だと、カデルリーが直接オンタリオ州政府の依頼を受けたかのように思えるが、『オンタリオ州のスイス人』では、フォン・ケルバー夫人がカデルリーに頼んだもののようである。

“In Toronto she was introduced to the distinguished scientist and traveller Jacques Kaderli, a professor of minerology from Berne, who was returning from scientific expedition to Japan. She persuaded him to lead an exploratory party to the Nipissing region. In the party were three farmers, Jacob Brunschweiler from St. Gall, Eduard Schmid of Basel, and Eduard von Zuben of Alpnach in the half-canton of Obwalden, all of whom were respected agriculturalists and, in her words, “experimental economists.” Accompanied by a guide, Jacques Kaderli led the expedition north to the beginning of the Rosseau-Nipissing colonization road, which, though nearing completion after seven years of construction, was open for its full length only for winter traffic. On 3 November 1873 the party set out by sled and four days later arrived at the farm of John Beatty near Nipissing.” (pp.84-85)。

「トロントで彼女は著名な科学者であり旅行家のカデルリーに紹介された。ベルン出身の鉱物学教授で、日本からの学術調査旅行の帰りであった。彼女は彼を説得して、ニピッシング地域の実地調査隊の指揮をとってもらうことにした。調査隊のメンバーには三人の農夫、ザンクトガレン出身のヤーコプ・ブルンシュヴァイラー（Jacob Brunschweiler)、バーゼル出身のエドゥアルト・シュミット（Eduard Schmid)、準カントン・オプヴァルデンのアルプナハ出身のエドゥアルト・ツーベン（Eduard von Zuben）の三人だった。三人とも立派な農業家（agriculturalists）で、彼女の言葉では『実験エコノミスト』(experimental economists）だった。道案内も同行したが、カデルリーはロッソ・ニピッシング移住民道路のスタート地点の北側への調査の指揮をとった。道路は7年の建築期間が経とうとしているが、全長が通行可能になるのは冬の時期だけだった。調査隊は1873年11月3日にそりで出発して、4日後にはニッピシング湖に近い

ジョン・ビーティー（John Beatty）の農園に着いている。」「著名な科学者であり旅行家のカデルリー」や「ベルン出身の鉱物学教授で、日本からの学術調査旅行の帰り」のところは信じがたい内容であるが、カデルリーの経歴詐称的傾向については次章でまとめて扱いたい。

カデルリーは実地調査の報告書を書いたらしいのだが、内容についての『オンタリオ州のスイス人』の著者の書き方はややあいまいである。"Members of this party appear to have found the Nipissing region suitable for colonization, for their report was glowing." (p.86).「この調査隊のメンバーにはニピッシング地域は移住地に適していると思われたようだ。なぜなら彼らの報告は熱烈だったからだ。」。"Kaderli's formal report was most favourable, too; in it he expressed the hope that there might soon flourish "a new Helvetia in Canada" and that the district might "become a happy home to hundreds and thousands" of Swiss immigrants." (p.86).「カデルリーの公式報告はきわめて好意的なものだった。この地域がカナダのニュー・ヘルベティア[34]として繁栄して、何百、何千ものスイス移民のふるさととなってほしいという希望をその中で表明している。」。無条件に移住適地と判断したかのようにも読めるが、別の調査者の報告と比較している部分では、"This report is unlike those written by Professor Kaderli, J.E. Hauswirth, and Elise von Koerber, all of whom weighed their statements carefully and warned immigrants of possible problems." (p.107).「カデルリー教授やJ.E. ハウスヴィルト（J.E. Hauswirth）やエリーゼ・フォン・ケルバーの報告では三人とも慎重な発言をしていて、起こりうる問題点について移民に警告する内容になっていたが、オットー・ハーンの報告は異なっていた」。これでは、手放しで推薦ということにはならない。「伝記」にもカデルリーのニピッシング地域の調査についての見解が紹介されているが、カデルリーの調査報告は全体的には好意的な判断を下したとしているが、同郷人に移住を勧めるものでは決してなく、移住をすでに決めているひとへの指針としてなら報告を公表してもいいと許可したのだと書いている（p.372）。

『オンタリオ州のスイス人』で触れられている「著名な科学者」であるカデルリーの発言としては、もう一つ、植物の生育期間の点でニピッシング湖がスイス北部のコンスタンツ湖（ボーデン湖）周辺に似ていると発言し、コンスタンツ湖周辺で育つ様々なブドウの種類がニピッシング湖周辺でも育つだろうと述べたと書かれている（p.86）。現在でもカナダワインの生産の中心地はオンタ

リオ州に限られているようだから、土地の鑑定の専門家でも農業の専門家でもないカデルリーの発言はまるっきり間違っていたということはなかったようである。

4．カデルリーはなぜ変名を使い、なぜ経歴を詐称したのか？

「伝記」で明らかになったカデルリーは日本のカデルリー像からは予想の付かないものではなかっただろうか。ナポリ王国での傭兵としての活躍、クリミヤ戦争への参加、ワルシャワのフランス領事館での大暴れ、シベリア放浪、華々しくいろいろなことが出てくるのに興味をそそられ、驚いた。しかし、わたしが一番驚いたのは、日本最初のドイツ語お雇い教師であり、『カデルリー文典』を書いたことを故郷の人びとにはまったく知らせていないことである。お雇い教師としてのカデルリーの業績は、日本最初のドイツ語お雇い教師であり、『カデルリー文典』を書いたことだとわたしは考えているが、カデルリー自身にとっては重要なこととは考えていなかったようだ。

日本で変名を使っていたことにも驚かされた。しかし、日本で Kaderly を使ったことには悪意は感じられない。本来、-li で終わる姓[35]はスイスを含めたアレマン系ドイツ語方言の姓である。ところが、a, e, i, o, u の母音で終わる姓、とくに i で終わる姓は英米では珍しい。アメリカ人の姓の頻度表[36]で上位 2,000 姓に li で終わる姓は見つからない。i で終わる姓にしても Rossi があるくらいである。一方、y で終わる姓ならかなり多い。上位 200 位に限っても、Murphy, Kelly, Bailey, Gray, Perry, Murray, Kennedy, Henry, Kelley, Berry, Bradley, Riley, Ray が見つかる。カデルリーが日本で Kaderly を使ったのは、おそらく、日本人や英米の同僚に分かり易い姓に改変したものだろう。インターネット検索をしてみると、スイスのアメリカ移民のひとに Kaderly という人が検索できるが、同じように、英語式に改変した姓だろう。なお、リンパハ村へ行ったときに電話帳をしらべてみたが、現在、カデルリーの生まれ故郷であるリンパハには Kaderli という姓のひとは住んでいない。電話帳に出ている近郊の村や町には 1 軒から数軒程度は Kaderli 姓のひとが出ていることは確認できた。ただし、Kaderly という表記はなく、すべて Kaderli である。『カデルリー文典』にはイニシャルの K の詩が収められているが、この場合の変名もカデルリーのお遊びと見ることができるだろう。

一方、カナダでの変名の場合はヤーコプ（Jakob）をジャック（Jacques[37]）に変えただけでなく経歴も偽っている。“the distinguished scientist and traveller

Jacques Kaderli”（『オンタリオ州のスイス人』、p.84）と書かれているのが誤解に基づくものだとは考えられない。「著名な科学者」というのも真実とは言いがたいし、“a professor of minerology from Berne”（前掲書、p.84）というところでも、「鉱物学教授」というのも変である。カデルリーが鉱山学、鉱物学、地質学と言われるような学問分野に詳しかったのはおそらく事実であろう。「伝記」の記述をまとめると、イギリスやアイルランドに滞在したときには講義を聴いたり、大英博物館やダブリンやエジンバラの博物館の鉱物コレクションを訪ねてまわっている。また、ウラル山脈の重要な鉱山を見て回ったことも書かれているし、鉱山学校で聴講したりもしている。シベリアの各地に5年間滞在しているが、その際のカデルリーの関心が、自然科学研究、とくに地質学研究、鉱物学研究にあったことも「伝記」に書かれている（„Das Hauptaugenmerk richtete Kaderli überall auf naturwissenschaftliche, besonders geologische und mineralogische Forschungen“、p.370）。しかし、だからといって、「鉱物学教授」と名乗るのは経歴詐称に他ならないであろう。「ベルン出身」と説明したことについては、リンパハでは誰も知らないので、ベルンの近くという意味でこう言ったものかもしれないし、カントン・ベルンの出身という意味なら間違いではない。しかし、日本での学術調査を終えて帰るところという説明もしているらしいので、かなり悪質な経歴詐称だと思われる。日本でのカデルリーは『カデルリー文典』の表紙では Lehrer der deutschen Sprache und Literatur（ドイツ語とドイツ文学の教師）と書き、「教授」（Professor）ではなく、「教師」（Lehrer）を使っている。

『オンタリオ州のスイス人』の中で描かれているカデルリーは経歴を詐称しているが、「伝記」のカデルリーにもその傾向は見られる。日本での経歴の説明がやはりおかしい。自然科学科目の教師として働き、地質学の調査旅行を何度も行ない、日本産鉱物標本を大量に集めた鉱物学研究者として描かれているからだ。当時は外国人が自由に旅行できたわけではなく、伺いや届けが必要であったから、地質学的な調査を何度も行なうというのは有り得ないと思われる。公文書の『太政類典』で確認できるのは「相州箱根へ旅行」（明治2年12月）と「伊豆熱海」（「大学南校ノ雇教師瑞西國人カデル外数名休業中旅行」、明治3年12月23日）ぐらいである。あとは、病気が理由で横浜に旅行したときの「南校雇教師独逸人カデルリー病気ニヨリ横浜へ旅行ス」（明治3年11月）という件名で見つかる旅行ぐらいである。

日本の資料ではカデルリーが鉱物学や鉱山学の授業をしたということを示す

ものはまったくないと言っていい。当時の日本にはまだなかった学問である。日本で最初に鉱物学を教えたと一般に考えられているのは、カデルリーが南校をやめた明治4年11月から入れ替わりに採用されたシェンクである。『資料御雇外国人』に引用されている「傭外国人教師講師名簿」(自明治二年至昭和二年、東京大学)を孫引きしておこう。「後チ専門学科ノ設置セラルヤ、彼ハ其教師ニ擢用セラレ、及チ鉱山学ノ一科ヲ担当シ、勤勉職ヲ奉シ以テ善ク其任期ヲ全ウス…我学生ニ専門学科タル鉱山学ノ大意ヲ授ケシハ彼其嚆矢ニシテ、其功ヤ亦看過スベカラサルモノアリ」。シェンクはクニッピングの義理の兄(姉の夫)でもあるが、『回想記』でもシェンクについては鉱山学との関わりが述べられているが、カデルリーについてそのようなことは述べられていない。また、日本人でもっとも早く鉱物学をはじめ、鉱物標本コレクションを集めたことでも知られている和田維四郎(つなしろう)は明治3年の大学南校入学時にドイツ語を選択した貢進生のひとりであり、カデルリーにドイツ語を学んだことは十分あり得ると思われるが、和田がカデルリーに鉱山学、地質学などを学んだり、影響を受けたというようなことを示す資料も存在しない。和田の書いた教科書の第3版『日本鉱物誌』(上巻、伊藤定一、桜井欽一共編、中文館書店、1947)の冒頭に「本邦産鉱物に関する研究の発達と本書の成立」があって、「我国に於いて鉱物学を自然科学の一分科として取扱いたるは明治維新の後にて、それ以前には鉱物は唯好事家、玩石家と称する一部の人々の間に愛玩せられたるに過ぎず」と述べ、「明治六年、東京に開成学校開設せられ、ドイツの鉱山技師カール・シェンクをして鉱物学の講義を行なわしめたり。これ我国鉱物学の濫觴にして、当時同校ドイツ部の学生に和田維四郎あり。」と述べ、明治6年を日本の鉱物学の授業の最初と見なしている。

カデルリーが大学南校で自然科学を教えたという「伝記」での主張に多少なりとも根拠がありそうなのは、大学南校で作成され、1871年に出版されているドイツ語教材 *Deutsches Lese- und Uebungsbuch.* Erstes Heft(『ドイツ語の読み物と演習』第1巻)の石炭と炭鉱についての章だろうか。この教材は、日本の最初期のドイツ語教材の一つであるが、序文もなく、解説もなく、編著者名もなく、誰がどのようにして作成した教材か明確なことは分かっていない。理系の入門読み物の章が幾つか含まれているし、かなり詳しい石炭と炭鉱についての章がある。拙稿(城岡 2006)では、カデルリーと大学南校の二人めのドイツ語お雇い教師のワグネル(物理学・数学分野の博士号とギュムナジウムでの数学と理科の教師資格を持つ)の二人の可能性の中で、カデルリーがこのドイ

ツ語教材の編集に関与した可能性はほとんどないだろうと述べた。しかし、拙稿の執筆時にはまだ入手していなかった「伝記」のカデルリーの経歴なども考慮に入れると、石炭と炭鉱についての章のドイツ語文はカデルリーが書いた可能性が出てきたと思われる。この教材ではドイツ語文の章には日本語の抄訳が付けられる形式を基本的にとっているが、この章では抄訳もほとんど付けられていない。この章は、独和辞典も出版されていない当時の学生にとっては、手に負えるようなものではなかったと思われる。したがって、カデルリーがこの章を元に石炭や炭鉱についての授業ができたとは思えない。しかし、この章を書いたのがカデルリーであったとするならば、大学南校で鉱山学や自然科学の教育に携わったのだと言えないことはないかもしれない。

「伝記」には日本産の鉱物標本のコレクション、「1,580 点もの鉱物、ひょっとしたら日本に存在するすべての鉱物を網羅した鉱物標本の大コレクション」を集めて、サンフランシスコのウッドワード博物館に貸与したと書いてあるが、この内容も極めて疑わしい。仮に多くの鉱物標本をカデルリーが持っていたとしても日本で収集したというのは考えにくい。ウラルやシベリアなどで集めたものだったのかもしれない。カデルリーの鉱物標本が展示されたと「伝記」で述べられてるサンフランシスコのウッドワード博物館は現存しないが、当時の展示品について何か分かれば確認できるものと思われる。カデルリーの日本産鉱物標本のコレクションの話は、当時の日本の鉱物学の状況からはおよそ考えられないことである。それは『日本鉱物誌』の次のような記述から分かる。「その頃の教育施設はすべて不完全にして、僅かに外国より購入せる百余個の小型鉱物標本と、ロイニス博物学一冊とを有するに過ぎず、本邦鉱物の如きは一も備えられず、又結晶の如きも学生自ら板紙を以って制作したる有様なりと云う」。カデルリーの鉱物標本は、本当なら、当時の水準から言えば確かにすごいことであるが、日本政府が買い上げようとしたという記録も日本側の資料からは見えない。

「著名な鉱物学教授」はカデルリーの夢見た理想の職業だったのかもしれない。カナダでは経歴詐称によって自分の夢を実現させたというところだろうか。オンタリオ州北部のニピッシング湖南東部の沿岸地帯がスイスからの移住に適した土地かどうかを調査して、3 人の農夫を連れて調査旅行をして、鑑定報告をフランス語で書いている。『オンタリオ州のスイス人』によると、この調査報告は公刊されたものではないが、スイスのベルンで印刷された冊子の付録として出版されたもので、カデルリーが変名を使わなかったら、ヤーコプ・カデルリー

を知っているひとが出てきて、経歴が暴かれ、農家の下働きから身を起こし、出奔して、ナポリで傭兵になり、その後、傭兵くずれとしてあちこちを旅行して回った男だと見破られてしまったかもしれない。カデルリーが何としても避けたかったのは、著名な鉱物学教授でないことがばれてしまうことだったのではないだろうか。おそらく、カデルリーがカナダで変名を使ったのはそんなことなどいろいろ考えたあげくの行動だったのではないだろうか。

【参考文献】

大橋昭夫・平野日出雄（1988）:『明治維新とあるお雇い外国人』、新人物往来社。

上村直己（1985 a）:「最初のお雇い独語教師 大学南校教師カデルリー」、『日本古書通信』50 巻 4 号、3-5。

――――（1985 b）:「明治初年の東京のドイツ語塾について」、『熊本大学教養部紀要』（外国語・外国文学編）20 号、43-63。

――――（2001）:『明治期ドイツ語学者の研究』、多賀出版。

グリフィス、W.E.（2003）:『新訳考証　日本のフルベッキ』、村瀬寿代（編訳）、洋学堂書店。（William Eliot Griffis: Verbeck of Japan. New York; Chicago; Toronto: Fleming H. Revell, 1900）。

城岡啓二（2006）:「1871 年刊行の大学南校のドイツ語教材について」、『人文論集』57 号の 1、静岡大学人文学部、67-106。

鈴木重貞（1975）:『ドイツ語の伝来』、教育出版センター。

田中梅吉（1968）:『日獨言語文化交流史大年表』、三修社。

釣　洋一（2004）:『江戸幕末・和洋暦換算事典』、新人物往来社。

西堀　昭（1979）:「フランス語教育」、『横浜フランス物語』（富田仁編）、産業技術センター、83-100。

――――（1988）:『日仏文化交流史の研究』増訂版、駿河台出版社。

――――（1996）:「明治維新前後のフランス学について」、『限りなき視線』、望月芳郎中央大学教授退職記念図書出版委員会、75-90。

山岸光宣（1937 a）:『学窓夜話』、東苑書房。

――――（1937 b）:「大学南校と独逸学」、『学燈』41 巻 1 号、2-5。

――――（1939 a）:「日本に於ける独逸語研究の沿革」、『独逸文学』第三年第三号、171-191。

――――（1939 b）:「大学南校文書の独逸学関係事項」、『書物展望』9巻5号、384-388。
ユネスコ東アジア文化研究センター編（1975）:『資料御雇外国人』、小学館。

【注】

---

1 Schalunen の自治体運営のホームページでたずねたところ、複数の発音の仕方があるが、普通はルーにアクセントを置いて「シャルーネン」のように発音するということだった。

2 インターネット上で共有される百科事典の国際的なプロジェクト。市販される既存の百科事典よりも情報量が桁違いに多い。

3 http://www.2xn.ch/kirche.htm

4 『東京開成学校一覧』の明治8年版は国立国会図書館の近代デジタルライブラリー（http://kindai.ndl.go.jp/）で公開されているので、閲覧、ダウンロードが可能である。

5 『東京開成学校一覧』の明治9年版は国立公文書館に所蔵がある。

6 『東京帝国大学五十年史』（上冊、第2篇）に「当時の名称に関しては或は開成所と称し、或は開成学校と称し、記録に於て一致を欠くも、医学所が復興せらるゝと共に医学校と改称せられたる例に徴すれば、本所も亦復興と共に開成学校と改称せられたるにはあらざるか」と断定を避けた書き方がなされている。

7 Gottfried Wagener

8 V. Holtz

9 Erwin Knipping

10 Karl Schenk

11 すでに井上哲次郎が『日本に於ける独逸語研究の起源及び其の発展』（日独文化協会、1934）の中で司馬凌海の語学の才能について「天才」、「天才者」という言い方をして、彼のエピソードなどを紹介している。

12 http://hls-dhs-dss.ch/index.php

13 「一覧」というのは、複数の大学を表にしたものではない。東京大学史史料室ＨＰでは、「『大学一覧（要覧）』とは、大学が公式に発行する年度ごとの大学に関するあらゆるデータを網羅した情報発信媒体であり、大学の全体像を捉える最大の基幹史料・文献といってよいでしょう。［…］なお、一覧が欠け

ている年は、殆どの場合『要覧』が発行されています。『要覧』は一覧をコンパクトにしたもので、一覧が発行されなかった年度に限り発行されています。」と説明している。

[14] 明治9年版の『東京開成学校一覧』には「東京開成学校沿革略史」の英訳 Historical Summary（裏から pp.9-13）も付けられているが、英訳はわりといい加減で、明治5年までは和暦と西暦が単純に対応していないにもかかわらず、皇紀2529年6月をそのまま西暦1869年6月に対応させている。校名についても「大学南校」や「南校」は使われずに Kaisei Gakko で通している。カデルリーの採用についても英訳ではまったく訳されていない。かわりに、In June 1869, a German Department was added to the school. つまり、学校にドイツ学科が出来たのは1869年6月という説明で済ませている。

[15] 明治八年版の『東京開成学校一覧』の方が分かり易い記載内容である。「二千五百二十九年明治二年六月独乙語学ヲ加設シ瑞士國人「カデルリー」ヲ以テ教師トス」（p.3）。

[16] 「日耳曼」は「ぜるまん」と読んで、ドイツのこと。

[17] 日本人教師が圧縮した版を出版したと考えられる第2版以降では5ページから12ページまでが発音の説明である。この部分は初版と同一内容だと思われるが、文字の大きさを変えたり、ページを大きくしたりして、ページあたりの文字数を変えているためである。

[18] 19世紀にはまだ Tal（「谷」）が Thal と書かれるなど、ドイツ語本来の語にも大量に th が使われていたが、1901年の正書法改革で th の表記は外来語を残してやめてしまう。発音の差がなかったことに基づく措置であると思うが、19世紀後半のドイツの学校文法の教科書『シェーフェル文典』でもこの二つについては今日の捉え方とはことなる説明をしている。t を harte Laute（硬音）に入れ、th を gehauchte Laute（息の出る音）に入れ、ch（[x] あるいは [ç] の音価）や f と同じタイプの音として区別している（1868、第7版、p.116）。今日一般的な音声学の用語に直すと、t を無声閉鎖音、th を摩擦音のように説明していることになってしまい、カデルリーの説明以上に奇異な解釈である。

[19] 山岸（1937a:62）に「この独和辞書の編輯には誰が従事したかといへば、南校教師カデリーと少助教相原重政、三浦祐次郎、木村繁生の四人が関係したことは、同記録（＝東京大学本部に所蔵される南校記録のこと）に見えてゐる」とある。

[20] この記述が何に基づくのか不明。

[21] 『資料御雇外国人』ではこの記載が『太政類典』からとなっているが、『公文録』が正しい。

[22] ミュルヒはリンパハの南西部にある隣村。ミュルヒには今日でも Kaderli 姓の人が何人か住んでいるようである。

[23] ドイツ文字の印刷字体では大文字の I と J の区別がなく、イニシャルは I とも読める。当時は、Johann とか Jakob とか Josef が男性の名前に多かったので、可能性として高いのは J と考えて、いちおう、J と表記しておいた。

[24] スイスのフランス語圏のカントンで、州都はローザンヌ。

[25] Fortbildungsschulen は複数形なので、複数の学校に通ったようである。小学館の『独和大辞典』(1985) では Fortbildungsschule の訳語として「農業実科学校」も載せ、スイスやオーストリアの用法としているが、カデルリーが通った学校が「農業実科学校」と言うべき種類の学校であったかは不明。

[26] 『スイスの歴史』(U. イム・ホーフ、刀水書房、1997) に「傭兵出稼ぎは、一八四八年に制度としては廃止された。しかし、現実には、最後のスイス人部隊がナーポリ王国から帰還したのは、ようやく五八年のことである。個人としては他国の部隊に加わることは、一九二七年まで容認されていた。」(p.183)。カデルリーは後にクリミヤ戦争に際してもフランス軍本部で働くが、このときは個人としてフランス軍に参加したものと思われる。

[27] スミルナはギリシア名で、トルコのエーゲ海の都市イズミールのこと。

[28] トルコの黒海沿岸の都市で現在はトラブゾン (Trabzon)。

[29] 「伝記」では Generalkonsulat (「総領事館」) という語は使っているが、Generalkonsul (「総領事」) という語は使っていない。一貫して Konsul (「領事」) を使っている。総領事と領事を区別していないのだろうと思われるが、ここでは「伝記」の記述通りに「総領事」としないで、「領事」とした。

[30] ワルシャワから 180 キロ離れた都市で当時はプロイセン領。

[31] 正確にはオホーツク海と言うべきところ。

[32] この校長 (Rektor) というのは誰のことだろうか。1.1 で引用した『東京開成学校一覧』(明治 9 年版) の「東京開成学校沿革略史」に基づいて考えると、素直に解釈すれば、頭取の内田恒次郎か、学校の校務を担当した学校権判事の細川潤次郎のことになると思われる。カデルリーの 2 ヶ月前に採用されたフルベッキはのちに教頭という立場で学校の運営に精力的に関与し、外国人教師の斡旋も行うが、フルベッキの可能性はないと思われる。なぜなら、フ

ルベッキが教頭になったのは、大橋・平野（1988：373）では明治3年7月、『新訳考証　日本のフルベッキ』の付録の年表では1870年11月頃（旧暦10月）とされ、はっきりしないが、いずれにしてもかなり後のことである。明治2年6月のカデルリーの採用をフルベッキが斡旋したということは有り得ない。

[33] Brustentzündung は正しくは Mastitis のことで「乳腺炎」のことらしいが、Lungenentzündung の意味で使ったものと解釈した。

[34] ヘルベティア（Helvetia）はスイスのこと。

[35] *Duden Familiennamen*（2000）によると、アレマン系ドイツ方言の姓の末尾に見られる -li は -lin と同じという記述がなされている。また、-li が -ly になるとは述べていないが、同じようにアレマン系ドイツ方言で使われている末尾形式 -i の場合は -y も見られるという記述があり、Erni と Erny をあげている。

[36] 木村正史の『英米人の姓名』（1980、鷹書房弓プレス）及び『続英米人の姓名』（1997、鷹書房弓プレス）に掲載されているアメリカの上位2,000姓を対象に調査した。

[37] Kaderly にしても、K にしても、Jacques にしても、カデルリーの変名は、名前の一部を残しているという共通点がある。カナダで使った Jacques Kaderli は、本名を隠し、本当の経歴が明らかにならないようにする目的があったと思うが、同時に、みずから隠れておきながら、手がかりを出すことでいつか自分を見つけてもらいたいと思っていたかのようである。なお、ドイツ語の Jakob とフランス語の Jacques は語源的対応関係にある。つまり、Jakob は Jacques のドイツ語形であり、Jacques は Jakob のフランス語形である。しかし、だからといって、名前を翻訳して使うというのは普通のことではない。

[38] カデルリーの報告はフランス語で書かれ、Comte-Rendu de mon expédition sur les côtes Sud-est du lac Nipissing, au Nord de la province Ontario en Canada (octobre et novembre 1873)（「ニピッシング湖南東岸地域の調査報告、カナダのオンタリオ州北部（1873年10月と11月）」）（『オンタリオ州のスイス人』、p.251）。Comte-Rendu は Compte-Rendu が正しいようだが、『オンタリオ州のスイス人』に書いてあるままにした。

【追記】

脱稿後に『横浜市史稿　教育編』（横浜市役所、1932）と『東京大学百年史』

（通史1、1984、以下『百年史』と略す）のカデルリーの記述に目を通すことができた。本稿で述べた内容と関係が深く、内容を補足するような記述もあり、追記のかたちでも触れておくのが必要であると判断した。また、見解を異にする点もコメントとして述べておきたい。

まず、『横浜市史稿』であるが、『高島嘉右衛門自叙伝』（実業之横浜社、1917）からの引用があり、そこには、「教師には瑞西人カドリー氏を聘したり。氏は大学南校に七千弗の年俸を以て傭はれたる人にて、是に獨・佛語を教授せしめ」とあった（p.11）。カデルリーが横浜の市学校でフランス語とドイツ語の教育を担当したと西堀（1979）や『横浜の本と文化』（横浜市中央図書館、1994、p.490）に書かれているが、この『横浜市史稿』の記述か、『高島嘉右衛門自叙伝』の記述が元になっているようである。カデルリーが市学校でフランス語も教えたと考える根拠が不明だと本論で書いたが、証拠はあったことになる。

次に『百年史』であるが、カデルリーの採用時期についての記載が、『東京帝国大学五十年史』の内容から変更されていた。「明治2年末にはドイツ学開講が計画され、ひとまずスイス人カデルリーが語学教師として採用された」（p.185）とある。また、掲載されているお雇い外国人の表でも雇用開始時期を明治2年12月としている。明治2年12月は従来の東京大学資料と公文書の矛盾を考慮したものだろうか。「大学南校ニ於テ独逸語伝習ヲ始ム」（『太政類典』）、「南校於テ独逸語学伝習ノ儀布達申立」（『公文録』）などが明治2年12月として記録されているのも事実であるので、大学南校におけるドイツ学の授業の本格的な開始時期が明治2年12月だったのは確実なことであろう。しかし、カデルリーの雇用開始も明治2年12月だとすると、『東京開成学校一覧』の明治2年6月と異なっている理由が説明できない。ドイツ学の授業が本格的に開始される以前にカデルリーが採用されていて、授業開始への準備をしていたとしてもおかしくないのではないだろうか。この期間を利用して『カデルリー文典』の執筆を行ったこともあり得るだろう。また、カデルリーの契約期間から考えても明治2年12月は不自然である。なぜならお雇い外国人教師との契約期間は半年を最低単位として当初は2年を目安にするという原則があったようであるからだ。カデルリーは、契約がいったん満期になって、半年の延長をして、明治4年11月26日に満期解雇になっているのである。明治2年12月が採用なら、明治4年11月26日では満期解雇にならないはずであるし、満期の後に半年の延長をしたという記述とも矛盾する。

『百年史』では、カデルリーの契約が継続にならずに満期解雇になった理由

についても新説を出している。大木喬任文部卿は、明治4年10月9日付けで出している意見書で「教授免許ノ證書モ無之、其学力生徒ニモ不及者有之」として南校のお雇い外国人教師のうち教授不適格者については契約切れで再雇用しないという方針を提案し、南校の全16名の外国人教師の半数の8名を選び出したのだという。『百年史』はこの8名の中にカデルリーが入っているのだというが、意見書中には「仏ガロー」と書いてあるのが、「契約日等から瑞人カデルリーの誤りと見られ」るのだと述べている。とすれば、カデルリーが再雇用されなかったのは、文部省や大木喬任文部卿の方針通りだったということになる。

『百年史』は、さらに、カデルリーが「学問の進展の前に不必要な存在として解雇されるに至り、感情の行き違いから、[…] 課外の活動や教科書作成に対する報酬を要求して大学側と対立するという悲劇を生み出すこともあったのである」(p.193) という解釈までしめしている。記述の元になっている資料として『公文録』をあげているが、該当箇所は不明だ。『太政類典』には「南校元雇教師瑞西人カテルソー定約時間外勤務セル報酬請求」という件名の記載が見つかるので、元になっているのはこの記載かもしれない。明治5年4月10日付けとなっている。満期解雇からかなり経ってからの話である。山岸 (1939b) がまとめている大学南校文書の『カデルリー文典』の争いの時期とほぼ同時期の話である。しかし、山岸 (1939b) から分かることは、大学南校がカデルリーには無断で『カデルリー文典』の再版を出版したことに対する抗議があったということで、「感情の行き違い」といった記述に要約してしまうことが適当だとも思えない。いわんや、カデルリーの満期解雇の理由を「学問の進展の前に不必要な存在として」と解釈するのは、『カデルリー文典』がカデルリーの死後も明治19年 (1886) の第3版まで出版が続けられたこと、また、明治17年 (1884) には「セーヘエルカドリーニ氏の文法ヨリ摘集セシモノナレトモ」という『ドイツ文典字彙』(山本剛著) のような語彙集が出版されていることなどを考えるととても妥当な解釈であるとは言えないと思う。たかだか2年半のお雇い教師の間に522ページの文法書を書いただけでなく (ドイツ語の知識の無い人がまとめたのだと思うが、『公文録』では「初学の読本」となっているが、初級から使える文法書であっても決して初級文法書ではない)、当時存在していなかった独和辞典作成作業にかかわり、授業以外でも日本人教員のドイツ語力の向上のために力を尽くしたカデルリーの正当な評価とはとても言えないものであると思う。

大木喬任文部卿の「教授免許ノ證書モ無之」という南校のお雇い外国人教師の何人かの者に向けられた批判についても付け加えておくと、『百年史』で「学

識が他に抜きん出ており、外国人教師の中でも特別な存在であった」として高く評価されている教頭のフルベッキにしてもアメリカの神学校を卒業しただけであるし、特定科目の「教授免許」のようなものを持っていたとは思えない。また、彼にしてもアメリカに移住する前のオランダ時代については経歴を詐称していたことが明らかにされてきている。出身地のザイストの記録によればアメリカに移住する間際まで「鍛冶屋の弟子奉公」をしていたことが確実であるが、伝記には「ユトレヒトの工業学校（the Polytechnic Institute of Utrecht）に入り、グロットという教授の指導の下で学んだ」ことが書かれているからである（『新訳考証　日本のフルベッキ』、W・Eグリフィス著、村瀬寿代訳編、洋学堂書店、2003）。また、学歴ということで言えば、言語学と日本語学の分野で多大な業績を残し、最初の東京帝国大学名誉教師になったバジル・ホール・チェンバレンも高卒で、銀行業が肌に合わず、ノイローゼになり、日本に流れ着いた人だったことを忘れてはならない。明治文明開化時代のお雇い外国人教師は、経歴詐称者であっても、出身国では高学歴ではなくても、実力があれば、活躍の場があったわけである。カデルリーが再雇用されない8人の中に入れられたのは、『百年史』が想定しているようなやや単純な理由ではなく、まだ解明されているとは言えない事情がいろいろ関係していたのではないだろうか。